

罪を織る

茅々斎かちかち 著

来俊臣らいしゅんしんは眉目麗秀、生まれ出てすぐに父母を驚かせ、四十七歳で刑死したときになお妖しい光彩を放った。

法を極端なまでに厳格に運用する役人を酷吏こくりという。何ら罪のない者でも、何かしらの嫌疑で獄に入れ、拷問を加えて白状させるならば、法の厳密な適用のもとで死罪にできる。酷吏は、時の権力の望む通りに、あるいは望む以上に、孜々ししとして冤罪を量産した。

来俊臣は最も悪しき酷吏であったとされる。羅あみを張り巡らして人を捕え、ありもしない罪を織りなすその所業を羅織らしよくと呼んで人々は恐れ、憎んだ。来俊臣は、自身の著作『告密羅織経』において、羅織こそは正義の発露であると誇った。

## 前篇 無頼の徒

**来俊臣**は永徽二（六五二）年に生まれた。唐の三代皇帝高宗が即位した二年後である。

来の先祖は長安近郊の農民だった。長安は、唐やその前の隋の時代の都である。隋の終わりに国は大いに乱れ、都周辺でも数多の民衆が圧政に抗して立ち上がった。来俊臣の祖父は村を飛び出して官と戦い、その頭目は、李淵の呼びかけに応じて長安攻撃に参加した。李淵は長安に入り、唐の初代皇帝として即位した。祖父は唐朝の下級役人として取り立てられ、晩年には郷里に近い土地の顔ききとなり、その後を長男が継いだ。次男は、上役に腰を低くして仕える父のようにはなりたくない、都に巢食う不逞の輩と交わりを結んだ。それが来俊臣の父の来操

である。

来操は博徒として名をなし、いくつもの賭場を仕切るまでになったのだが、唐の世が安定してくると息苦しさを感じ、博徒は己一代限りと見定め、息子は兄のような役人にさせるのがよかろうと考えた。折しも妻を喪い、残された息子を男児のいない兄に託そうと決めた。来俊臣が生まれる前のことだ。

来操は息子を連れて兄の村を訪ねた。役人である兄の手前、村人には博徒であるの隠して古着商と偽った。実際に古着を携え、求める者には安い値で売った。その噂を聞いて、近くの村の富農の息子の蔡本さいほんが訪ねてきた。楊家ようから迎えた嫁との仲がしつくりせず、都の衣類でも買い与えてやれば少しは機嫌よくしてもらえるのではないかというのだった。

「今回はたいしたものは持ってきておりませんのです。とりあえず、いまあるも

のでお気に召しますか、若奥様にご覧いただきましようか」。

来操は蔡本の家に出向いた。来操はまことに人当たりがよく、蔡本はすっかり気を許し、妻に直接会わせた。楊氏は目を見張るばかりに美しい女性で、田舎男の蔡本にはいかにも不似合いだった。

来操は持参した衣類を投げやり、

「これらはとても若奥様にお目にかけられるようなものではありません。都に帰れば、お似合いのよいものがあるのですがなあ」。

さも残念そうに嘆いた。

来操は近頃の都の様子を蔡本夫婦に面白く語った。

蔡本は妻に請われて、来操が帰京するのに合わせて都に行くことになった。

来操は、ごく上等の品を驚くほどの安値で手に入れさせ、蔡本を連れて都の名

所を案内した。

「ちよいと面白い遊びがあるのですが」。

賭場に誘った。蔡本は尻込みしたが、恐る恐る賭けてみると立て続けに勝ち、着物に支払った以上を儲けた。

「ここらがよい潮時です。深みにはまって身を持ち崩した者をたくさん見ました。お気を付けください」。

来操はさっと切り上げさせると、次に遊里に連れた。

蔡本は都ほどよいところはないと大いに喜んだ。

「村まで荷を運んでさしあげましょう」。

来操はあくまでも親切だった。

妻の楊氏は着物を大層気に入り、来操はしばらく村に滞在して、ちよくちよく

家に入りしした。来操と楊氏が怪しい仲になるのにさほど日数を要しなかつた。

蔡本は都での楽しさが忘れられず、来操が都に帰るのに合わせて、また行きたいと言ひ出した。楊氏も一度は都を見たいと願ひ、夫婦ともに上京ということになつた。

都に着くと、蔡本は賭場と色里に入り浸りとなり、来操と楊氏はこれ幸いと好きなことをした。

蔡本は気が付くと賭場に莫大な借金を積み上がつていて、怖い連中に脅されて震え上がった。来操に泣き付くと、来操は親切にもその尻拭いをしてやった。

蔡本は妻を連れてしおしおと村に帰り、

「このままではすみませんでしょう」。

と妻に言われ、どうにか金を工面して都に返しに行った。それを来操に渡す前

に賭場で増やしたら、手放した田舎の土地を取り戻せるとふと思い付いた。ところが、ずるずると負け、どうしてそのようになったのか訳がわからないのだが、数十万銭という途方もない足を出してしまった。

蔡本は、銭が払えないのなら命を出せと脅され、またしても来操に泣き付くよ  
りなかった。

「これは困りましたな」。

来操も金額の多さに洩ったのだが、どうにか話をおさめた。

蔡本は村に帰り、来操に借りを返すあてはなく、これでは死ぬ以外にないと思  
い詰めると、妻の楊氏が、

「もしも私が借銭のかたになってすむものならば」。

と言った。蔡本は他に思案もなく、妻を連れてまた上京した。



来操は気の毒がって承知しなかったが、蔡本が平身低頭で頼み込むので、やむをえまいと楊氏を受け取った。このとき楊氏は妊娠していて、生まれたのが来俊臣だった。世に稀な美しい子であった。

**来**操と楊氏の仲は長続きしなかった。容色の衰えぬうちにと楊氏を売りとばし、来操は別の女を妻に迎えた。

来操は、来俊臣が成長するにつれ、自分に似ていないと感じるようになり、後妻が生んだ弟ばかりを可愛がった。もとより継母は冷たかったから、かまってくれるのは父の子分たちだけで、物心ついたときには来俊臣はすでに賭場と馴染みになっていた。

来操は、来俊臣にしてもその弟にしても、博徒にさせる気は毛頭なく、学問を

習わせた。来俊臣は少しの文字を覚えただけで投げ出し、子分たちのところに逃げた。弟は熱心に励み、ますます父母に可愛がられた。

来俊臣は親の目を盗んで銭を持ち出しては賭場に通った。年頃になると、遊里にも出入りするようになった。ぞくつとするような美少年であったから、色里の女はほうっておかなかつた。次第に、父の来操に負けず、女を騙すわざを身に付けていった。

来操は、そのような息子をどうにかしようと、堅気の商家から嫁を迎えた。来俊臣は否応なしだった。嫁は大層気の強い女で、義父の後押しのもと、夫をまともな人間に矯正しようと、厳しく監視し、始終小言を並べ立てた。来俊臣は辟易し、家にあまり寄りつかなくなり、たまに帰るといつも大喧嘩だった。

そのうちいい塩梅に、

「心根を入れ替えていただくかない限り戻って参りません」。

嫁は自分から家を出ていった。

これで父から完全に見放され、来俊臣は何の気兼ねもなく裏街道の住人となり、幾人かの弟分を持つ身となった。そのなかに来子珣らいししゅんといういささか気の弱い男がいた。来子珣の父は立派な官人で、己も官人になるべく勉強していたのだが、悪い友人に誘われ、気の弱さからずると道を踏み外し、いつしか「兄貴、兄貴」と、来俊臣にくつついて歩くようになった。

来子珣は小さく手堅い勝負しかない。

「そんなちまちまとやっていて何が面白いのだ」。

来俊臣は弟分と違って大きな勝負を好んだ。博打の腕は父譲りで大方は勝ち、適当なところで収めておけばいいのに、熱くなると必ず途方もない賭けに出て、

そっくり失くしてしまうのだった。

「兄貴の悪い癖です。それさえなければ大した財産家にだってなれるのに」。

弟分にくら言われても性懲りもなく何度も繰り返した。しよつちゅう金に困り、色街の女でも市井の女でも、甘く言い寄って金品を巻き上げ、勝負の元手にした。このような自堕落な暮らしのせいで、来俊臣の色香に凄みが加わった。

このころになって、ひよんなことから、来俊臣は初めて蔡本のことを知った。

それまで生みの母の楊氏は病死したと聞かされていた。自分は蔡本の子ではないかと疑い始め、父をより一層憎むようになった。蔡本は、来操のために財産も妻も失ってすっかり落ちぶれ、楊氏が売り飛ばされたと聞くと、その行方を捜しに都に出てきて、しばらくの間、裸同然の姿であちこちうろろしていた。そのうち、どこかの屋敷の下男に拾われ、犬以下の扱いをされて死んだらしかかった。

蔡本について教えてくれた古い子分は、楊氏について、

「とにかくお綺麗な人でした。どうして親分は棄てちまったのでしょうかなあ。あつしには気が知れません。あつしだったら、何が何でも大事にします。どれくらい綺麗だったかというと、この広い天下に、もしも勝る人がいるとして、たぶん、お若かったころの皇后様くらいでしょうかなあ。それだってどうかわかりません。もつともあつしは皇后様を拝見したことがないのですが。とにかく、天下一の美しさでした」。

皇后様とは高宗皇帝の妻の武氏ぶである。

武氏は幼いころから評判の美少女だった。十四歳のときに、二代皇帝たいそうの太宗に召された。十四年後に太宗は死に、武氏は宮中を出て感業寺で髪を下ろした。太宗の後を継いだ息子の高宗は、感業寺に出向いた折に偶然その尼姿を見かけた。

二人は太宗皇帝を偲んでともに泣いた。

このときの皇后は王氏おうであった。高宗は王皇后よりも蕭淑妃しやうしゆくひを寵愛し、子のない王皇后は蕭淑妃に皇后の地位を奪われてしまうのではないかと恐れていた。王皇后は、感業寺でのことを伝え聞き、武氏を後宮に入れば蕭淑妃への熱が冷めるのではないかと考え、武氏に髪を蓄えさせて、皇帝に引き会わせた。皇帝は武氏に夢中になり、蕭淑妃を顧みなくなっただけでなく、王皇后を廃して武氏を皇后にしようと考えるまでになった。王皇后は先帝が息子のために特に選んだ女性であったから、重臣は一樣に反対した。皇帝は断固押し切って皇后を取り替えた。これが後にいふところの則天武后そくてんぶごうである。

**来俊臣**は、蔡本のことを聞いてから後は、父とは一度も会わず、数年後に死ん

だときにも葬儀に出なかった。来操が仕切っていた賭場を巡って子分たちが争った。来俊臣は完全に除け者で、来俊臣の弟は役人になろうとしていたから賭場の継承には一切関わりなかつた。激しい抗争の末に賭場を手にした者は、それ以後、来俊臣を目の敵にし、ありとあらゆるところで迫害した。

来俊臣はどここの賭場からも締め出され、古い馴染みの子分たちからも知らん顔をされ、その日の食い物にも困るようになった。以前なら女を騙す手を使ったであろうが、母が来操に棄てられたと聞いてからは、憎んでも余りある父と同じこととは決してしないと心に決めていた。そうでなくとも、色里に足を踏み入れると、因縁をふっかけてくる者が必ずいた。来俊臣は細身の色男で喧嘩は強くなかつた。仕方なく弟のところは無心に行くと、継母が出てきて追い払われ、妻の実家に行くと手ひどく邪慳にされ、郊外の村で下っ端役人になった兄のところに行くと、

棒でもって叩き出され、

「今度またのこのこ来たら、必ず牢に叩き込むぞ。今日だけは兄弟のよしみで見逃してやる。おまえがこれまでしてきたことを思ったら、どのようなお仕置きがあるか、わからないはずがないだろう」。

他にどうすることもできず、なおもただ一人「兄貴」と言ってくれる弟分の来子珣のところへ転がり込むしかなかった。

来子珣も父親から勘当同然にされ、長安の場末の野っばらにぼろぼろの小屋を持つだけで、二人して空き腹に水で何日も過ごすようなありさまであった。

——こんなことで死んでしまうのか。

いかにもつまらないことだが、それをどうかする思案がなく、ただじつとして夢ともなくうつともなくぼんやりしているばかりであった。



ある日、まこと夢のなかであったのか、寝転んでいると、遠くから声が聞こえた気がした。心地よい響きに懐かしさを覚え、

——母だ。

と不意に思った。

じつと耳を澄ますと、

「私のところへいらっしやい」。

そう言っているようだった。

来俊臣は考えた。

——どこへ。俺はどこへ行くのか。母のところへか。それは黄泉よみの国か。母は俺に死ぬと言ったのか。確かにこのままでは死ぬしかない。生きていても無駄と母は言うのか。

そのように思うと、悔しくてならず、

「畜生」。

隣の来子珣の脇腹を蹴った。

「兄貴、ごめん」。

「何を謝っているのだ。おまえ何か悪いことをしたのか」。

そう言いながら、もう一度、蹴った。

「わからないけれど、私のせいなのでしょう」。

「おまえのせいなのか。おまえにそんなことができるのか」。

来俊臣は起き上がり、

「わかったぞ。悪いのは世の中だ。大の男が飢え死にだと。下らん。そうだ、お

まえ知っているか、皇后様はいまどこにおられるのだ」。

いままで思ったこともないことを考える。

「皇后様ですか。皇后様でしたら、きつと洛陽らくようでありましょう。」

「洛陽か。そうか。よし俺は洛陽に行くぞ。決めた」。

「急にどうしたのです」。

「俺は皇后様にいま呼ばれたのだ」。

「皇后様に呼ばれたって。何を言い出すのです。兄貴、どうかしてしまったのですか」。

——母ほど美しいのは皇后くらいだと言っていた。ならば「私のところ」と言ったのは皇后に違いない。

来俊臣はそのように無理やり考えた。

——よし、こいつはいける。

来俊臣は檻樓小屋を出ると、弟を訪ね、脅したりすかしたりし、今後は一切の縁を切ると誓って銭を恵んでもらい、洛陽に向かった。

武皇后は皇后になるとすぐに、元の皇后の王氏と蕭淑妃を殺した。蕭氏は死に際に、「願うのはただ一つ、次の世もまたその次の世も猫になり、鼠となった武氏の喉を幾度も噛み切ってやること」と呪った。武皇后は宮中で猫を飼うのを禁じ、それでも崇りを恐れて長安の宮殿を嫌い、洛陽に居を定めた。

来俊臣は長安の門を出ると、都に向かって呪詛の言葉を投げ付けた。  
「この世から消えてしまえ」。

——俺はここでは生きられなかった。俺が悪いのではない。都が悪いのだ。  
来子珣が後を追ってきた。

「帰れ。俺についてきても何もいいことはないぞ」。

「いいんです。兄貴と一緒にいたいだけなのです」。

来子珣はさすがに。

「妙な奴だ。覚悟の上なら別に断りはしない。俺は大きな勝負がしたい。おまえがいつも言う通り、俺の悪い癖だ。どうせまた負けるだけだ。わかっている。だけど、負けたっていい。洛陽に行つて一生に一度の大勝負をしたい」。

「大勝負つて、どのような」。

「聞きたいか。俺は考えた。本当の大勝負とは何なのか。天と地をひっくり返す。

早い話、一番の貧乏人が一番偉くなり、一番の金持ちが一番惨めになるってことだ。あるいは莫<sup>し</sup>産<sup>さ</sup>を身に巻きわずかな錢で色を売る女が、金欄<sup>きんらん</sup>の御殿の奥におさまるお姫様になり、逆にお姫様が袖乞いをして歩くようになる。昨日まで獄に繋がれていた連中が明日には朝堂に並び、衣冠を身に着けていた高官どもが獄で疥

癖に苦しむ。そうなたらどうだ、きつと面白いだろう」。

「兄貴は恐ろしいことを言う。ぞくつとします。で、その勝負はどうやって行うのです」。

「馬鹿だな、わかっていれればいますぐにする」。

「洛陽に行けばできるのですか」。

——俺は皇后に呼ばれたのだ。

さすがにそのことは弟には言わず、

「わからぬ。だけど、俺の祖父じいさんの時代には、世の中が本当にひっくり返った。

威張り腐っていた皇帝が殺されて隋は滅んだ。今日偉そうにしている連中は、そのときにひっくり返ったおかげだ。俺の祖父さんは不細工にもしがたい小役人にならなかつた。もつとも本当の祖父さんではないけれどな。とにかく世の中

がひっくり返ることは実際にあったのだ。だけど、普通に考えて俺一人でそんな勝負ができると思うか。できるはずがない。負けるに決まっている。俺についてきても何もいいことはない。それでよければ勝手にしろ」。

来俊臣は寂しく笑った。このときすでに三十二歳になっていた。

**光宅元**（六八四）年春、洛陽にきて二年が経った。

大勝負の夢は虚しく抱くだけで、結局はしがない賭場暮らした。

勝負に出る呼盧ころの声の響きから離れ、奥の暗がりへと身を潜ませる。人々の影が遠く灯の前で揺れる。焼けるようだった己の体を冷たい壁に押し付ける。

「随分と派手にやっていたようだな」。

先客がいる。

「まあな。あそこは勝負に出るしかなかったからな」。

「で、うまくいったのかい」。

来俊臣はむっとする。

「わかりきったことを聞くな。それでここにくるものか」。

先客は低く笑い、

「お互い同類だ。仲良くしようではないか」。

床に寝そべる男を、彼方からのわずかな明かりに見る。時折ここにくる飛騎ひきの

兵だ。下手に喧嘩でもしたら勝ち目のない大男だ。

「おまえさまも運がなかったのですか」。

来俊臣は少しく言葉を改める。

「きれいさっぱりだ。運がないからなのか。たぶん、違うな。むしろくしゃした



気分で作ったからだ。おまえはどうだった。焦っていたのか」。

来俊臣は舌打ちする。

「わかりましたか」。

「あの熱の入れようは尋常でなかった」。

「いつもの癖です。無茶な勝負に出てしまう。焦っていないければやらなかったかもしれません。気付いたら、すっからかんです。そうなるだろうと思っただけです」。

「物事は大概そうしたものだ」。

妙に訳知りのような言い方が気に食わず、少々毒付いてみたくなる。

「おまえさま方が羨ましいですな。ここで負けても、屯所に帰れば、寝るところはありましようし、いい飯も食えるし、着る物も御立派なのが、そりゃあ、あり

ますのでしよう。こちとらときたら、そのどれ一つだってありはしません。本当にお羨ましい」。

飛騎は皇帝の護衛兵で、皇帝の遊幸の際などに見栄えのいい服を着飾る、兵士のなかでも特別な存在である。その屯営は宮城の北門脇にある。

「俺たちが羨ましいか。そう見えるか。俺には、そちらさんの方が羨ましい」。

兵士は大きく息を吐く。

「何を言うんです。飛騎は並の兵士とは違う。なりたい奴がいくらだっています。俺だってなれるものならなりたい。こちとらみたいな、借銭と不義理ばかりを持ち合わせた身になりたいとは誰も思いません。なるのは簡単ですがね」。

来俊臣は笑う。

兵士はむっくりと上体を起こし、

「またむしゃくしゃしてきやがった。面白くない世の中だ」。

肘で壁をどんと突く。

「何かあったのですか」。

「何かあったのかだと。あったから、むしゃくしゃしているんだ」。

「左様でございますか」。

「左様かだと。わかったように言うな。何だか知りたいか」。

「へえ」。

「しかし、これは言えない」。

兵士は低くつぶやく。

「言ってますいことなら、聞きやしません」。

来俊臣は立つそぶりを見せる。兵士はその袖を引き、

「まあ、待て。もう少しここにいろ。いいか、博打で負けたことに俺は文句を言わない。しかしだ、あれは汚い。許せない。むしゃくしゃして、どうにもならない。だから、ここで勝って、すつきりと晴らしたかった。畜生」。

兵士はまたごんごんと壁を撃つ。

「余程、面白くなさそうですね」。

兵士はしばらく黙り、

「おまえ、どうしても聞きたいか」。

「おまえさまが話したければ、どうぞ」。

「いいか、絶対に内緒だぞ」。

「賭場にくる人間が約束を守ると思えますか」。

兵士は顔を近づけ、

「なかなかの色男だな。おまえのような奴はあまり信用できない。女を騙すのが得意だろう」。

「どうですかな」。

そこに長い影が近づき、

「兄貴、ここだったのですか。いつの間にかいなくなっていて、帰ってしまったのかと思っていました」。

「帰るのか。どこに帰るのか。洛陽にも居られそうにない。こちらさんのおっしゃる通り、面白くない世の中だ」。

兵士は、

「そちらは」。

「こちららの弟分です。ここに出入りするにしては珍しく実直な奴です。大きな

勝負には出ないから、詰まるところ、こちとらより稼ぎがよく、兄貴、兄貴と立てられている割には、世話になっています」。

来俊臣はわずかに笑う。

弟分は兵士の前にかしこまって挨拶する。

兵士は来子珣をじっと見据え、

「こちらの弟さんは信用できそうだ」。

「こちとらとは違います。黙っている俺が言えば、背中に溶けた鉛を注がれても、絶対に口を割りません。そういう奴です」。

来子珣は顔を伏せる。兵士はその肩を叩き、

「よし、わかった。黙ったまま帰ったのでは、むしゃくしゃがおさまらない。この男に話そう」。

来子珣は来俊臣の顔を見る。

「決して他言しないと、俺が約束すれば、こいつは必ず守ります」。

兵士は声を潜め、

「まあ、聞け。聞いたら忘れろ」。

「へえ、必ず」。

来俊臣と来子珣はうなずく。

「では、この正月のことから始めようか。おまえたちが知っているか知っていないか俺は知らぬが、我ら飛騎の者は、この正月に皇太后様の特別の御命令を受け、剣を磨き、鎧を輝かせ、皇太后様の前後をお守りして、乾元殿かんげんでんへと乗り込んだ。乾元殿は知っているだろう。宮城のなかでもひとときわ立派な建物だ。国家の大事を決める際には百官をそこに集めて皇帝陛下がお出ましになる」。

兵士の声には誇らしげな響きがある。

「乾元殿の階の前に到着すると、皇太后様のお声が響き、我らは武器を手にしたまま、皇太后様とともに昇った。殿上には、皇帝陛下を始めとして、朝廷の最もお偉い方々がおられた。皆様方は非常に驚かれた御様子だった。皇太后様は厳しい声で、座を譲るよう皇帝陛下にお命じになった。皇帝陛下は檀より降りられた。全身が震えておられた。代わってその場に皇太后様がお立ちになり、皇帝を廃すると仰せられた。皇帝陛下は驚愕し、皇太后様のところへ駆け上ろうとされた。『階の下に蹴り落とせ』。皇太后様の御命令に、まさかその通りにはしなかったけれど、我らは皇帝陛下のお体を抱えて階段を下った。陛下は身悶えし、何やらお叫びになった。こうして皇帝は廃され、新たにいまの陛下がお立ちになった。我ら飛騎はこのような働きをしたのに、褒賞を下さるとの御沙汰は一向になかつ



た。ある日、十人余りの仲間が町に繰り出して酒を飲んだ。酔ううちに、つい日頃の不満を漏らす奴がいた。『何の褒美もないじゃないか。こんなことなら盧陵王様の方にお味方すればよかった』と言った。

確かにこれは人に聞かれてはまずい話だ。

前年の弘道元（六八三）年十二月に三代皇帝高宗が死に、皇太子の李顒りけんが即位した。高宗の後半生は病気がちで、政事の一切を武皇后が取り仕切り、都は実質的に洛陽に移った。夫の死後、立場が皇太后に変わったものの、武氏は手にした権限をそのまま保持しようとした。新皇帝は武太后の子ではあっても、皇帝の権威を回復させたいと考え、母の力を抑えようと図った。妻の韋皇后いげんていの父の韋玄貞いげんていを要職に就け、外戚の後押しを得て母に対抗しようとした。武太后は即座に実力行使に出て、飛騎を使って息子を皇帝の座からまさに引き摺り降ろして、弟の李旦りたんと

取り替えた。李頭は皇帝から盧陵王に格下げとなった。

来俊臣は、

「ここから先は言わないでおくのがよくはありませんか」。

「ここで止めてはいよいよ気分が悪い」。

「そうですか。では、こちとらは聞いてもすぐに忘れるとしましょう」。

「それでだ、一人が火を付けたものだから、他の者も不満をぶちまけた。酒を飲めばそのくらいのことはよくあるだろう。ひと通り言い終わると、たわいもない別の話に移った。皆がいい加減に酩酊したころ、何やら店の外の様子が変だと気付いた。いつの間にか、嚴重に武装した兵士の一団に囲まれていて、連中は何が何だかわからぬままに縛り上げられた。皆が飲んでいる最中に、一人がそつと抜け出て北門に走り、『兵士どもが不埒な相談をしています』と密告した。それで連

中は反逆罪で獄に放り込まれたのだ。厳しく尋問され、それでどうなったと思う。

兵士は急に大きな声になる。

「酔つての愚痴でありましょう。仕置きじよきの杖で三十も叩かれましたか」。

来俊臣はわざと軽めに答える。

「最初に口火を切った者は反逆の首謀者として斬罪、その他の者は、重大事を耳にしながらお上に告げなかった罪で絞殺だ。それもひどい話だが、もつと氣に入らないのは、告げ口した兵士だ。どうなったと思う。いいか、『告密』こくみつの手本を為したとして五品官に除せられたのだ。『告密』を知っているだろう。その褒美が、おい、五品官だ。わかるか、五品官というのはな、緋色の服に金帯を付けて宮中に入りできるのだ」。

「ははあ、豪気なものですな」。

「豪気すぎる。仲間の酔言を告げ口し、自分だけ五品官に出世して、これからは大威張りだ。十一人を死なせて自分だけ大出世だ。これほどむしゃくしゃする話には他にない」。

「汚い野郎ですな」。

「ああ、汚い、汚い」。

「羨ましいですか」。

「羨ましくなどない。そんな人間の屑になど成り下がりたくない。畜生」。

兵士はぼったりと床に寝そべる。

来俊臣は来子珣の腕を引いて立たせ、賭場を出る。

「こいつはいいことを聞いた。これが告密だ。一つ俺も狙ってみるか」。

告密とは、人に知られぬ悪事をお上に告発すること、近頃、武太后が大々的に

推奨し始めたのを来俊臣も聞いている。

「五品官とは途方もない話です。本当なのでしょうか」。

唐代の官人の品級は一番上の正一品から一番下の従九品下まで九品二十階に分けられ、五品はその中央の位だ。来子珣の父は長年官職にあつてもまだそこに達していない。来俊臣の祖父や伯父は役人ではあるが、九品官よりもさらに下のはした役人だ。お上に仕える役人には、九品官以上の官人と、品級のない吏人がいて、両者の身分の差ははなはだ大きい。

「太后様は本気だというところを見せたいのだろう」。

「どうしてそこまでするのでしょう」。

弟分に問われて、来俊臣は急に武太后の心がわかるような気がした。

「それは不安だからだ。告密によって、心配の種をそっくりなくしてしまいたい

のだろう」。

——女一人で世の中を変えるのだ。苦勞は並大抵ではあるまい。

どうして洛陽にきたのかを思い返し、

——やはり、あれは太后様だったのだ。告密こそ、太后様が俺を呼んだ理由だ。

「だけど、あの飛騎が怒るのももつともな気がします」。

弟分が言うのを耳に入れず、

「よし、勝負に出よう」。

来俊臣は策を練る。

「兄貴、あんまり身の丈に合わないようなことは成功しないと思うのだけど」。

来子珣は止めに入る。

来俊臣も、大きな勝負に出てはいつも失敗ばかりであったので、手始めはそこ

そここのところで様子をみよう、告密に便乗した強請ゆすりを試みる。二人してある商家に乗り込み、官人に賄賂を贈っている証拠を掴んでいるという話を来俊臣がうまい具合にして、口止め料をせびる。相手は怯え、金を出しかける。ところが、最後の詰めで来子珣の気の弱さが災いして化けの皮を剥がされてしまう。二人は痛い目に遭い、役人に突き出されそうになって、ほうほうの体で逃げる。

一度では懲りず、少し手を変えて別のところでやってみる。それも失敗だ。

役人に付け狙われる身となり、賭場にはすでに悪い借銭が山のようにあつて、とうとう洛陽からも出て行かなければならなくなる。

「今度こそここで別れよう」。

洛陽城の門の外で来子珣に言う。

「いえ、どこまでだって兄貴について行きます」。

「長安に帰れ。おまえはそれが一番いい」。

「帰りません。兄貴がいなかったら、俺はどうしたらいいかわからないのです」。

「わからなくはないだろう。家に帰ればいいのだ。おまえはやり直せる。ここで縁を切るのがおまえのためだ」。

「そんな風に言われると悲しくなります」。

「すぐ来る来子珣を突き倒し、」

「いいから、帰れ。そこからこっちに一步もくるな」。

「懐を探つて小さな包みを投げ付け、」

「最後の最後にと取っておいた銭だ。恥ずかしいがそれしかない。これで長安に帰れ。兄貴と言われる俺の最後の命令だ」。

「来子珣は袋を握り、」



「これがなくて、兄貴はどうするつもりですか」。

「それがあつたところでどうにもならない。俺を兄貴と呼ぶのなら、俺の言うことに従え。おまえのためを思つて言つているのだ」。

来子珣はうなだれ、

「もう会えなくなるのですか」。

「たぶんな。おまえには感謝している。礼を言う」。

「礼なんかいいです。それより、これで兄貴と別れるかと思うと辛いです」。

来子珣は泣く。

「だったら、約束するぜ。これが永遠の別れではない。いつか会うこともあるだろう。そしてだ、今度おまえと会うときには、必ずおまえにいい目に会わせてやる。そう約束する。できるはずがないと、俺も思っているけどな」。

来俊臣は笑う。

「俺のことなどどうでもいいのです。兄貴も、とにかく長安に帰ってきてください。いろいろあったことだって、そのうちすっかりほとぼりが冷めます」。

「それはどうか。世間のしがらみって奴は執念深く纏わり付く。俺だって、いまだに親父を恨んでいる。結構な長安から追い出され、洛陽からも出て行かなければならないのは悔しい。この悔しさは、百年経つても、千年経つても、俺は忘れない。俺は負けてばかりだ。いつか勝ってやりたい。長安、洛陽には、大きな屋敷を構えて威張り腐った連中がうようよしている。奴らだけがどうしていい目に会っていられるのか。大勝負を仕掛けて覆してやりたい。俺はやり損なつた。ちつぽけな商人を強請つたのがまずかった。大きな獲物を相手にすればよかった。だが、俺は大勝負に弱い。もうよそう、愚痴を言い出したらきりが無い。ここ

で別れだ」。

来俊臣は弟分を置いて駆け去る。

**来**俊臣は南に流れ、世を恨んでその日その日の悪事を為すうちに、悪人としての性根が座る。

夏の終わりに、長江北岸の和州に達し、土地の盗賊団の仲間入りをする。すぐに頭角を現す。来俊臣は見目がよく、それでいて凄みがあり、大きな企みを思い付き、人を使うのがうまい。「兄貴」と従う者がいる一方で、「新参者のくせに」と毛嫌いする者もいる。

九月、和州からさほど遠くない揚州で反乱が勃発する。唐朝による天下統一が為されてから初めての大掛かりな反乱だ。

「こいつはいい。世の中がひっくり返るぞ。二度とない好機だ。俺たちだつていつまでもちまちました盗人稼業ではない。和州を乗っ取ろう。刺史を斬つて、州の倉にある物をそっくり取るのだ」。

刺史とは州知事だ。

来俊臣のいつもの大きな話に、勇む者もいれば眉を顰める者もいる。

反乱の首謀者は李敬業だ。りけいぎょう祖父の李世勣は唐朝の樹立に大きく貢献した十二功

臣の一人だ。かつて高宗皇帝が皇后を取り替えようとして重臣が揃つて反対したときに、李世勣だけは「誰を皇后にするかは陛下の家のなかのこと、他人に問う必要はありません」と、皇帝を支持した。武皇后は李世勣に恩義を感じ、国家の元老として特別扱いをした。その孫が武太后に齒向かい、同調者が多く出た。

和州乗っ取りは半ば本気であったのだが、計画を立てる以前に、来俊臣は獄に

繋がれてしまう。仲間の誰かに売られたのだ。告密である。

——せつかくの好機に虚しく殺されてしまうのか。

獄中で懸命に考え、一発勝負に出る。

獄卒に銭を贈り、

「実は私は重大な秘密を知っているのです。国が転覆するかもしれない重大事です。刑罰を受けて死ぬ前に、どうかしてこのことを刺史様にお知らせしたいのです」。

首尾よく刺史の前に連れて行かれる。このときの和州刺史は李続りぞくである。来俊臣は人払いを頼み、李沖りちゆうが謀反を企てていると告げる。李続も李沖も太宗皇帝の孫だ。

来俊臣は何も知っていない。話は大きい方がよい。それが洛陽での失敗から得

た教訓だ。元勳の孫の李敬業が反乱を起こしたのだから、皇族の誰かが武太后に反抗してもおかしくない。

李続の顔色が変わる。

——これはうまくいく。

「どうしてそちはそれを知ったのだ」。

根も葉もない作り話を自信ありげに告げる。

「これはよくよく詮議せねばならぬ。他言は無用だ」。

来俊臣は獄に戻される。

数日して獄卒に呼び出される。

——よし、この賭けは当りだ。

ところが、裁きは杖撃ち百と決まり、即刻執行となる。来俊臣は抗弁しようと

するが、口を塞がれ、衆人の前でたたかに撃たれる。

それで死んでしまえば終わりだった。仲間の誰かが役人に鼻薬を効かせてくれたのだろう、杖撃ちはわずかに手加減されていて、半死半生の状態で、和州の城門から外に放り出される。

すでに夕暮れ時。手荒く地面に転がされると同時に、門が閉ざされる。全身が腫れ上がって、呻き声を上げる力も残っていない。

——また勝負に負けた。

来子珣との約束を思い起こすと、無性に悔しい。

**反**乱軍は敗れ、李敬業は戦場で斬られる。武太后は、反乱にわずかでも関与した者は必ず捕えよと厳命する。告密の嵐が吹き荒れ、洛陽の獄はたちまち罪人で

溢れる。索元礼さくげんれいと周興しゅうこうが取り調べに当たり、恐るべき拷問を用いて芋蔓式に罪人を増やし、極刑に追いやる者の数を競い合う。武太后は二人を激賞する。

「告密の門」が設けられる。告密をする者は、全国どこからでも直ちに洛陽に行けるよう、馭馬と食事が支給される。洛陽には告発者のために立派な客館が建てられる。

垂拱四すいこう（六八八）年八月、李冲が反乱を起こす。自分が旗を挙げれば全土の皇族がすぐに呼応するはずとの見込みであったが、実際に動いたのは李貞りてい一人にとどまる。李冲は拳兵からわずか七日間で敗れ、博州の町に逃げ込もうとして門衛に殺される。討伐軍を指揮していた丘神勳きゅうしんせんは事がすんでから博州に到着し、手ぶらで引き揚げたのでは格好がつかないと、博州の富民千余家が反乱に加担していたとして処刑し財産を奪い取る。



丘神勳は、つい最近まで洛陽の獄で罪人の詮議をしていた役人で、先に武太后のために汚れ役を引き受け、その見返りとして、討伐軍の指揮官に抜擢されたのだった。まだ高宗皇帝が生きていたところに、武皇后は皇太子を取り替えた。当時の皇太子は李賢<sup>りけん</sup>で、母が皇帝よりも上に立とうとしていることに反発する態度を見せた。武皇后は李賢を皇太子の座から降ろして遠く巴州<sup>は</sup>に追いやった。新たに皇太子になったのが弟の李顕だった。その李顕が後に皇帝になるとやはり母に反発する態度をとったので、武太后は飛騎を使って皇位から引きずり降ろしたのだが、そのとき、武太后は巴州に流した李賢の動きが気にかかり、丘神勳を派遣して無理やり自殺させた。武太后は、丘神勳が勝手にしたことだとして遠流にし、しばらくしてから洛陽に呼び戻した。

李沖が博州で死ぬと、続いて李貞も敗れ、反乱は終結する。

武太后政権は、皇族が起したこの反乱を、李敬業の反乱よりも一段と深刻に受け止め、多数の皇族、高官を洛陽の獄に繋いで、徹底的に糾明する。索元礼と周興の厳しい詮議に、罪人は等しく自供し、結果、幸運なわずかな者だけが流罪で、あとは軒並み死刑となる。武太后の娘の太平公主の夫の薛紹せつしょうでさえ獄中で餓死させられる。餓死は親族ならではのまだしもの温情である。

## 中篇 羅織の臣

**来**俊臣は、地方のちっぽけな賭場で李沖の反乱を耳にする。

——ついに運が巡ってきた。

役所に飛び込み「告密の門」を叩く。早馬が用意され、四年ぶりに洛陽に入る。

「私はつとに李沖の企みを聞き知り、当時和州刺史であった李統様に告げました。ところが、私は杖打ちを食らわされ、殺されかけたのであります」。

傷痕を見せて訴える。

和州に人が派遣され、事実であると判明する。李統は不運にも、反乱に関連する大方の処分が終わった後に、他の人々より遅れて死刑となる。

来俊臣は武太后に呼ばれる。

宮殿の階の下でじっと平たくしている。季節は冬の初め、朝早い地面は冷たい。それを感じている場合ではない。

——ここが一生の大事、逃したなら二度とこない。

李沖に続く獲物を用意してある。

——嘘であっても、獲物が獄に連れてこられたならば、索元礼や周興が白状させるに違いない。俺の言ったことが真実になる。

遠く奥の方でわずかな物音がし、警護の者が武太后のお出ましを告げる。頭を一層低くし体を硬くする。

しばらくして静謐の声に続いて、役目の者が、来俊臣が階下に控え居ることを、

武太后に告げる。

御簾みすの向こうより声が漏れくる。

「そちはいかにして誰よりも先に李沖の謀反を知ったのか」。

わずかなその言葉を耳にして、来俊臣の身が堅く縮む。胸の鼓動が激しく鳴り出し、全身に汗が噴き出る。

——何かおこったのだ。

自分の体が自分のものではない。勝手に小刻みに震え出す。顎から地面に汗がしたたり落ちる。

——俺はどうしてしまったのか。

ここから逃げたい一心に駆られる。

武太后に問われて、何かしら返答を言わなければならない。しかし、歯の根の合わないくらいに顎も震えている。

——これはいけない。

何も言えず、武太后を怒らせ、またも杖打ちを食らって、洛陽から追放される己の姿が脳裏に浮かぶ。

——何のために俺はここにきたのか。

来俊臣は俄かに悟る。

——嘘を言うためであってはならない。

用意してきたものを棄てる。

震えが止まり、下腹に力を入れ、這いつくばったまま脇の役人に尋ねる。

「お答え申してもよろしいのでしようか」。

ひどく上ずった声だ。

「そちは何か恐れているようであるな。何の遠慮もいらぬ。申してみよ」。

武太后の声が再び響く。それは美しくも力強い。

——ああ、これは。

夢に聞いた母の声と同じだ。

——俺がここにきたのは、やはり呼ばれたからだ。

心が定まる。

口を開くと、思ってもみないことを言い始める。

「正直に申し上げます。某は、今日はこのような場に身を置かせていただく

それかし

第となりましたが、恥ずかしながら、某は良家の子弟ではなく、祖父の代より世に無用の者と蔑まれた無頼の徒にございます。母の顔さえ知らぬ野卑な生まれにございます。そのような某でありましても、もしも世に出る他の道がありましたならば、お天道様の下を堂々と歩ける人間にきつとなっていたでありません。しかしながら、生まれながらに定まったものであったのでしょうか、悪の道に落

ちるより生きる術がなく、心ならずも、どこまでもどこまでも落ちてしまったのでございます。されば、悪の道は悪でございまして、世の悪事というものは、悪人どもの間には自ずと聞こえてくるものなのでございます。和州の獄に繋がれましたときに、我が先非を悔い、いかに困難であつてもこれよりは正道を歩み直そうと一念発起し、刺史様に重大事をお告げいたしました。しかし、残念ながら信じていただけませんでした。これも身の不運、もとより人から信用されない生き方をしてきたからだ、と、某一人のことであればあきらめるのでございますが、もしもあの折に、某が申すことを取り上げていただけましたならば、何万もの兵を動かすことなく、たった一人の捕吏を派遣するだけで済んだはずであつたと思ひますと、はなはだ残念でありまして、洛陽へとしゃしゃり出てきた次第にございます。御褒美を頂戴しようとかいうのではなく、某のような無頼の徒でありまし



ても、国のためになりたいとの心がありますことを、世の人にわかつていただきたく、ただただそのためにやってきたのでございます」。

来俊臣はいつしか能弁になっている。

武太后は言う。

「先にそちが言うのを和州刺史が取り上げておれば反乱は未然に防げた。告密こそは天下を守る最もやすい道である。罪人を野放しにしておいてはならない。

この一件は重大な教訓となる。そちはよくぞ洛陽にきてくれた。嬉しく思う」。

来俊臣は地に平たくなる。

——何を俺は言ったのだろう。

良し悪しの判断もなく、口から衝いて出るに任せた。自分が言ったことも、武太后がいま何を言ったのかも、来俊臣は呑みこめずにいながらも、どうやら失敗

ではないらしいと感じる。

武太后は言う。

「悪の道は悪と申したが、李沖の他に、そちがいま知ることはないか。和州刺史のような理不尽な杖打ちなどは決してせぬから申してみよ」。

来俊臣はうろたえる。用意してきたものがあつた。しかし、それは棄てた。拾おうとすればまた体が震え出すに違いない。

「恥ずかしながら、某は町のごくつまらない無頼漢でございまして、耳も目もさして利かぬ者にございます。李沖様の件はたまたま耳にいただけで、世にはよい目、よい耳を持つ者が多数おります。そのような者にお尋ねになるのがよろしいかと存じます」。

しどろもどろの返事に、冷たい汗が流れる。

——俺は何を言っているのだ。

自分がどうなつてしまっているのかさっぱりわからない。

「さようか。では聞こう、よい目、よい耳を持つとはどのような者なのか。」

来俊臣の身が竦み、

「恐れ多くも、陛下のお耳に達してよろしいような者は一人もございません。」

「よいから申してみよ。」

来俊臣はいよいよ困惑し、

「では、一、二、三ばかり挙げるのをお許しただけですならば」

かすれた声を上げ、やぶれかぶれで、

「雍州醴泉ようしゆうれいせんの侯思止こうしし、冀州衡水きしゆこうすいの王弘義おうこうぎ、雍州長安ようしゆの来子珣かくこうは、廬江ろこうの郭弘霸かくこうはな

どつどつと申します。」

——俺はもう駄目だ。

全身がぐつしよりと濡れる。

い。ずれも悪事の仲間だ。無理に名を挙げるにしても、そのような者しか知らな  
い。

「聞かぬ名であるな」。

——終わりだ。

そう思うと、妙に気持ち落ち付き、

「世には埋もれた者が大勢おります。立身の道を塞がれ、せつかくの才があつてもお上のために役立てられず、ややもすれば世を拗ね、悪の淵へと落ちてしまうのでございます。世の中にとりまして大いなる損にございます」。

「残念ながらそのようなこともあるうか」。

武太后の声は優しげで、それに励まされて来俊臣は続ける。

「たまたま良き家柄に生まれたというだけで上に居並びます方々が多数おられ、その一方で、いまその名を申し上げました侯思止などは、本来才能がありながら、気の毒にも、文字さえ習うことができぬまま、醴泉で餅を売ってその日その日を侘しく送っているのでございます。暖衣飽食の者が謀反を企て、忠義の心を宿している者が一生を無為に終わらねばならぬのでございます」。

「その者たちは呼べばすぐにくるか」。

「勿論喜んで馳せ参じましょう。不埒な企てにうつつを抜かしてこのたび死罪になりました良家の方々と、よき機会を得られぬままに町に埋もれております士と、いずれが陛下の御為になりますか、たちどころに明らかに致すに相違（ちが）ございません」。

「そちはどうなのだ」。

「某でございますか。侯思止の志操堅固であるところ、某などは足元にも及びません。某は己の至らぬところを知っております。いま名を挙げました者の橋渡しができれば十分に満足でございます」。

「なかなか謙虚であるな。だが、かい隗より始めよと言うではないか」。

来俊臣はじつと身を低くする。

——これはどういうことか。

なぜかわからないが、話はよい方向に進んでいるらしい。

「おもてを上げよ。顔を見ねば、しかとはわからぬ」。

脇の役人に無礼にならぬか尋ね、許しを得てゆつくりと顔を上げる。

階の上に垂れる御簾が目に入り、その向こうは見えない。しかし、自分に注が

れている武太后の視線をはつきりと感じる。

——母だ。

母より与えられたこの顔を母に見せている。

御簾の向こうで小さな吐息が漏れる。

「よろしい」。

——この母に呼ばれたのだ。

「御史台ぎよしだいに行け。索元礼さくげんらいに仕事を教わり、よく励め。侍御史じぎよしになれるかどうかは

そなた次第だ」。

**御史台**は、官人や将士の犯した罪を取り調べる機関で、糾問きうもんに当たるのが侍御

史だ。その上に御史中丞ぎよしちゆうじやうがいて、通常は侍御史はその監督下にあるのだが、索

元礼や周興は侍御史でありながらも、武太后の直接の指示で存分に腕を振るうことが許されている。

来俊臣は索元礼の前に連れて行かれる。五品官の侍御史と博徒との身分の差は天と地ほどだ。どのような作法で拝礼すればいいのかもわからず、ばったりと床に伏す。

「立て。そしてわしに顔を見せろ」。

索元礼の低い声に、来俊臣は従う。

索元礼は、頭の上から爪先まで三度ばかり繰り返し見る。

「そのつらでこの仕事は勤まるかな」。

そう言う索元礼のつらこそ見物である。長安で生まれ育った来俊臣は西方からきた胡人こじんを見馴れてはいるのだが、これほど怪異な容貌は見たことがない。鼻が



異様に大きく高く、眼窩が穴のように深く、極端なまでの凹凸がある。碧色の大きな瞳に常の人情が宿っているようには見えない。そして見上げるばかりの巨漢である。

「おまえは人を殺したことがあるか。そのつらで」。

来俊臣は、答えていいものかわからず、口を閉ざしたままである。斬り合いは幾度かあった。相手に傷を負わせたこともあった。しかし、殺してはいない。喧嘩の腕はさほどではない。

索元礼は手を伸ばしてきて、来俊臣の頬を撫ぜる。ざらざらの太い指だ。

「ふん」。

と、笑う。

「今日はおまえの詮議をするのではない。人を殺めた罪あやを取り調べるのだったら、

こんなふうに優しく聞きはしない」。

来俊臣の襟首をぐいと掴み、

「汚い着物だ。これでよくまあ皇太后様の前に出られたものだ」。

索元礼は顔を近づけ、先程から来俊臣の襟元でむずむずしている虱をつまみ取り、

「こいつを捻り潰すのと、人を殺すのと、どちらが難しいと思うか」。

来俊臣はなお無言でいると、

「答える。別にわしは怒ったりしない。今日は機嫌がいいのだ」。

無難に、

「人でありましょうか」。

索元礼は虱を手の平に乗せ、ふっと吹き飛ばし、

「大事なことを教えてやろう。人は案外簡単に死ぬ。やすやすと死なせてはならない。虱はいま許してやったが、人は決して許さぬ。それがおまえにできるか」。

索元礼はぎろりと睨み、

「おまえはすでに御史台にきた。それがおまえにとって幸運であるかどうか、わしは知らない。この仕事が勤まるかよく考えるがいい。このつらでな」。

索元礼は眉の辺りに触れる。来俊臣はぴくりとも動かない。

「無理だと思ったら、さっさと逃げろ。今日のうちならうまく後始末をつけてやる。心配いらん」。

索元礼はさも愉快そうに笑う。

来俊臣は頭を深く垂れ、

「有難くも皇太后様より賜りましたお仕事、誠心誠意お努めする所存にございま

す」。

その通りに心を決めている。

——俺は特別に認められたのだ。母と慕う俺だからだ。それで、流れ者から這い出る唯一無二の機会を与えられた。何が何でもこの大恩にお応えしなければいけない。

「誰もがそのようなことを言う。この前の奴もそうだった。この仕事は始めたが最後、途中では辞められない。どうしてもというときは死をもって終わるしかない。その覚悟がおまえにあるか」。

凄みをきかせる索元札に、

「勿論でございます」。

それ以外の返答はありえない。

「何もわかっていないくせに、強がりを言うな。ここでまともに仕事ができているのは周興君一人だけだ。この前までは丘神勳君がまあまあの仕事ぶりを見せてくれていた。丘君が出て行ってしまったので、代わりの者がほしいとちようど思っていたところではある。しかし、おまえにできるだろうか。そのつらでな」。

「必ずやらせていただきます」。

「今日一日だけは様子を見よう。わしはこう見えても気が優しいのだ」。

索元礼はまた襟を掴み、

「では、仕事場を見せてやる」。

索元礼の大きな体の後ろに、もとより小柄な来俊臣は腰を屈めて付き従う。

「あそこが獄舎だ」。

高い塀があって、門の前に数人の獄卒が立つ。索元礼の姿に、獄吏は石のよう

に固まって礼をする。

幾棟もの黒い建物が並ぶ。来俊臣は和州の獄にしばらくいたので、特有の饅<sup>+</sup>えた臭いに驚きはしない。一棟ずつ順になかに入る。そのたびに索元礼は来俊臣の顔をのぞく。来俊臣は努めて平然としている。いまは反乱の後始末があらかた終わって罪人は多くない。

とびきり強烈な悪臭を漂わせる建物があり、さすがにその入り口では足が止まり、

「入ってみろ」。

背中を強く押される。

つまずきかける。下が竹の格子になっている。そこからこの世のものとは思えない臭いが湧き立ってくる。

「のぞいてみる」。

息を止めて格子の隙間に顔を寄せる。真暗闇だ。

「糞尿がたっぷり溜めてある。ここでも二、三日泳がせてから、引き上げて水ぶっかけてやると、奴らは涙を流して感謝する。あつさり自白する。世話がいらぬ」。

その隣の建物には、多数の細い柱で組まれた筒形の牢がある。

「頭の皮がぱんぱんになるまで髪を強く引っ張ってあちこちの柱に縛り付ける。尖った竹で奴らの体を時々突く。昼も夜も眠らせない。少々手間だが、穏やかで、大して血も見ないし、臭くもないし、なかなかいいやり方だ」。

索元礼の声は次第に楽しげになり、

「ついこの前まで、ここには入り切れないほどにたくさんの囚人がいた。呻き声やら泣き声やら、人間というものはこうも様々な声が出せるものかと感心させら

れたものだ」。

獄舎を出て、次に、罪人を糾問する場に連れられる。

「ここがわしらが本当に仕事をする場だ。今日は初めてだから、ここらあたりからがよいだろう」。

木の塀で囲まれたなかに拳大の石を敷き詰めた広場がある。中央に太い鎖が置かれている。

「あれに罪人を繋ぐ。おまえ、試しに座ってみろ」。

来俊臣は言われた通りにする。石の角が当たって痛い。

「前と後ろに鎖をかけて、動けないようにする。今日はそこまでやらないから安心しろ」。

獄卒が二人がかりで、人の頭の倍ほどの大きさの鉄製の籠を運んでくる。



「鉄圈籠頭と呼んでおる」。

「どのようにするのでしょうか」。

「知りたいか」。

来俊臣がうなずくと、頭に籠が被せられる。肩にずっしりと重みがかかり、足や尻が一段と痛くなる。首のところで留め金が合わされ、そこに楔が挿入される。

「おまえ、自分でこれを捻ってみろ」。

索元礼は来俊臣の手に楔を掴ませる。

「回せ」。

籠が縮んで頭に食い込む。

「これまでで一番強情だった奴は、ばりばりと頭蓋骨が割れ、脳味噌が飛び出した。よくぞそこまで頑張ったものだ。大方は簡単で、一人に鉄圈籠頭を被せれば

百人は捕まえられる」。

次は、天井に鳳凰ほうおうの絵が描かれた建物だ。大きな仕掛けが置かれている。

ほうおうさいし

「鳳凰ほうおう曬翅さいしという。優美な名だろう。わしのお気に入りだ。試してみたいか」。

断わる訳にはいかない。中央の大きな台の上に仰向けに横たわる。

索元礼は来俊臣の腹を軽く叩き、

「本当は縛り付けるのだが、それは許してやろう」。

二本の丸太を水平に組み合わせた器具が四つあり、それを引き寄せて、来俊臣の手足の先をそれぞれ丸太の間に挟む。

「ぎりぎりと丸太を回しながら胴の方へ寄せたり離したりする。手足が鳳凰の翅のように優美に伸び縮みする。作ったときは丸太は真白だったが、罪人の血やら油やらが染み込み、いまではこの通り黒光りしている」。

次は、屋根が高い建物で、太い梁が渡され、縄で括られた大きな岩が二つ床にころがっている。

「これは見たままだ。石頭せきごろうという。ここに連れてきて見せるだけで結構効果がある。気の弱い奴はすぐに何でも話す。いまは岩は床に置いてあるが、罪人を連れてくるときには、二つの岩を梁から吊り下げしておく。一方の岩の下に罪人を座らせる。顎を上げさせ、頭の上の岩を見るようにさせる。真冬でも、すぐに汗びっしりだ。十分に見せてから、もう一方の岩の縄を切る。岩が落ちて床が揺れる。罪人は飛び上がる。頭の上の縄を切るぞと脅すと、大概の者はすぐ白状する。なかには強情な者もいるので、床がそのように汚れてしまっている」。

索元礼はその建物から出ると、

「まだいろいろあるが、おいおい覚えていけばいい。おまえに才能があれば、新

しいものを作ってくれてもいい」。

最初の部屋に戻り、

「どうだ、気に入ったか」。

索元礼は上から下まで視線を動かして、また来俊臣をじっくりと見る。

一切の動揺を見せまいとする。

「さすが都の獄はたいしたものでございます」。

「いまなら辞められるぞ」。

「とんでもございません。是非とも務めさせていただきとうございます」。

——ここがどれほど異様な場所であっても、ここで生きて見せるしかない。

「やる気さえあれば、わしは細かいことを言わない。最初は見て覚え、要領がわかったら、後はおまえの好きにしろ。大事なのは皇太后様のために励むことだ。」

それさえやってくれているれば、わしは文句を言わない。わかりきったことを言うが、これだけは必ず覚えておけ。我らは、皇太后様のために罪人を詮議して処罰を決める。それによって天下が正しく治まる。罪人を取り残してはいけない。一人よりは十人、十人よりは百人、百人よりは千人だ。罪人を多く片付けるほどよい。我らの働きは、どれだけ多くの罪人を処罰したかの数で決まる。単純で非常にわかりやすい。皇太后様はきちんと仕事をすれば御褒美を下さる。そうでない者はどうなるか、言わずともわかるだろう」。

来俊臣は深く頭を下げる。

「親切にもう一つ注意を加えると、周興君には気に入られるようにしろ。周君はなかなか気難しい。下に付いた者は苦勞するようだ。能なしには洩はなもひっかけず、能がありすぎると気に入らない。周君のところでは長続きしているのは衛遂忠えいすいちゆうだけ

だ。あれは実には変わった男だ。あのようにおまえができるとは思わない。とにかく、周君には逆らうな。挨拶してこい。うまくやれそうにないと思つたら、わしに言え。何度も言うように、今日のうちならおまえは辞められる。わしの教えは、どうだ懇切丁寧だろう」。

索元礼は笑つて来俊臣の肩を押す。

**周興**に向かつて精一杯恭しく拝礼する。周興は座したまま体を斜めにし、「せいせい励むのだな」。

口中で、もぐもぐと二、三の注意をさも大義そうに並べ、

「いつまで床を嘗めている。もう立つていい」。

来俊臣はゆっくりと身を起こす。周興は立つて背中を向けて窓際にいき、

「他に聞きたいことがあるか」。

来俊臣はその背をしばらく見つめ、

「もしや長安のお生まれではございませんでしょうか」。

「それがどうかしたのか」。

「都のお生まれはやはり隠せぬものと思いましたがものですから」。

周興は振り返り、

「きさまはどこだ」。

索元礼とは対照的に平べったい顔で、目が異様に細い。声は妙に甲高い。

来俊臣は身を低くし、

「長安です」。

「どんな家だ」。

「伯父が郊外の村吏でした」。

「そうか、村吏か」。

周興は再び背を向け、吏人の家に生まれ、貧乏暮らしのなかで懸命に法律の勉強をしたことを言い、

「きさまは何を学んだ」。

「そのようにお尋ねされますと、この場で消えてしまうよりありません。学んだと申し上げられますのは、せいぜい檮捕ちよぼくらいでございましょうか」。

「馬鹿を言うな。学問について尋ねているのだ」。

「まことに困りました。字は自分の名がどうにか書けるだけでありまして、お上のお仕事についても実は何も知らないのをごさいます。思いがけず大きな役を仰せつかまつりまして、困り果てております」。



周興はあからさまに溜息をつき、

「そんな奴ばかりがくる。全く困ったものだ」。

来俊臣は床に顔を付け、

「本当に何も知りませんのです」

「まあ、考えようによつては、生半可な知識がある者よりはよいかもしれぬ」。

周興は衛遂忠を呼ぶ。

背の高い男が戸口で身を縮め、

「お呼びでございましたようか」。

「新しくきたこやつが何も知らんと言っておる。いつものあれを持ってこい」。

衛遂忠はすぐに駆け出て、たちまち息せき切って戻ってくる。

「手始めにこれを読んでこい。話はそれからだ」。

周興は、薄い書物を来俊臣の鼻先に突きつける。来俊臣はそれを両手で頭上に押し戴く。

「自分の名が書けるとか言っておったが、それでどうなのだ、それくらいなら読めるのだろうか」。

「はあ、どうでしょうか」。

「どこでもいい、開けて読んでみせろ」。

来俊臣は書物をのぞき、一文字、二文字、読み上げる。実にたどたどしい。

「おまえ、手本を見せてやれ」。

衛遂忠は書物を見ることなく朗々と声を響かせる。それを聞くと、どうやら処罰の規定であるらしい。

「あのように読めるように練習してからまたこい。三日のうちにできなかつたら、

おまえはここにはいられない。太后様のお役に立たぬからだ」。

来俊臣は深く頭を下げて引き下がる。

衛遂忠が後に付いてくる。振り返って丁寧に挨拶すると、衛遂忠はぴよんと飛び退く。

「旦那様は皇太后様の御命令でこちらにお越しになったのでございましょう。あつしどもとは御身分が違います」。

「あれよあれよという間にこのようになっちゃってしまい、何が何だかわからず、ただおろおろするばかりです。ぜひいろいろ教えていただきたいものです」。

来俊臣が頭を深く下げると、衛遂忠はその高い背を二つに折り、

「あつしがお教えるなどんでもないことです」。

来俊臣は、衛遂忠が身を起こす前に、その手に金を握らせる。武太后より褒美

として戴いたばかりのものだ。衛遂忠はすばやく懐に収め、

「旦那様の御評判は伺っております」。

衛遂忠は体をくねらせながら、変に甘ったるい声を出す。これとそっくりな男をどこかの賭場で見たような気がする。

——こんな奴はどこにでもいる。

衛遂忠の舌は驚くほどによく回る。李沖の一件を大手柄と褒めそやし、

「旦那様のように御苦労をなさって、下々の者の心が本当にわかるお方がこれからここでお裁きをなさるようになれば、世の中はきつとずつとよくなりましょう」。

薄い唇から、人の気分をよくさせる言葉が次々に出てくる。

「悪に強いのは悪とは、まことに名言でございますな。それに、よく言いますように、悪より正に返った者が何よりも強いとか。旦那様がまさにその通りだと、

これから大層な評判になりましょう」。

つい先ほど武太後の前で言ったばかりのことを衛遂忠が口にする。人の隠し事を詮索するのがここの仕事とはいえ、いささか薄気味悪く感じる。

「何しろ、皇太后様によって特別に見出されたお人でございますからな。そこらの連中とはまるで違います」。

——その通りだ。

と、思わず大ききうなずきそうになるのを、来俊臣は慌ててごまかしながら身を屈め、

「折り入ってお願いがあるのですが、いまお預かりしたこの書物です。もしよろしかったら、何が書いてあるのかお教えいただけないでしょうか。何しろ、先程、

御覧いただきましたように、知っている文字を拾って読むのだけで精一杯なもの

ですから」。

「あつしがですか。とんでもない。あつしなんぞは、ただ闇雲に暗誦しているだけですよ。中身については実のところは何も知りませんのです。あつしなどよりは、しゅなんざん朱南山さんにお尋ねされるのがよろしいでありましょう。おとなしくて、親切なお方でございます。とにかく文章がとてもお上手で、索元礼様がお上に差し出される上奏文は、大概は朱さんにお命じになっているのでございます」。

来俊臣は、獄での仕事についてあれこれ尋ねる。

衛遂忠は首を振り、

「あつしなど、ただここにいるだけで、ろくに物がわかっておりません。旦那様は御心配には及びません。これまで幾人も見てまいりましたが、旦那様なら、もうひと目できつとうまくなさるとわかりましてございます」。

やたらに來俊臣を持ち上げる。

御史台の獄には、侍御史の仕事を手伝う、主簿、記事、令史、書令史、亭長、掌固などさまざまな職種の吏人がいる。衛琢忠や朱南山がそれだ。

——とにかく、上の者とも、下の者とも、まずはうまくやっけていくことから始めるしかないのだろう。

索元礼のところに戻ると、

「どうだ。辞めることにしたか」。

「これを読むように言われました」。

「そうか、それを渡されたか。ならば、今日のところはうまくいったようだな」。

索元礼はにやりと笑う。

**そ**の日とその翌日は、朱南山に口移しで教わり、練習に次ぐ練習だ。朱南山はごく几帳面な男で、丁寧に教えてくれる。

夜もろくに寝ずに練習して、誤らずに暗唱できようになると、忘れぬうちにと、すぐに周興のもとに行く。

「もうきたのか。一日早いではないか。本当に覚えたのか」。

周興は冷ややかに言う。

来俊臣は唱えてみせる。

「まあまあだな。では、頭のなかにきちんと入ったかどうか試してみるか」。

周興は五つの問を並べる。ただ棒暗記しただけの来俊臣は何を聞かれたのかもわからない。床に頭を叩き付けて謝る。

「大方そんなところだと思っていた」。



周興は鼻で笑う。

来俊臣は背中に汗を流しつつ正答を尋ねる。

「その頭では、書物を読ませてもどうせ無駄だな。しかし、お上の御命令でここに来たのだから、勝手にお願い箱にする訳にもいくまい。しばらくはわしのやり方を見て覚えるのだな。とりあえず、そこの隅に立っている」。

その日はそのままただ立って過ごす。

三日間は、周興は何も言わず、来俊臣も何も言わず、終日、部屋の隅に立っているだけだ。

「今日は、後に付いてこい」。

周興は、来俊臣を脇に立たせて、罪人を尋問する。索元礼が案内してくれたはずれの部屋でもない。こぢんまりとした部屋で、周興は馬鞭だけを用いる。罪人

は嫌疑を必死になって否認する。衛彦忠が馬鞭で打つ。鮮血が飛び、罪人は悲鳴を上げる。周興は横目で来俊臣を見る。来俊臣は表情を変えずに罪人を凝視する。

調べが終わると、

「可哀想だとは思わなかったか」。

周興の間に、来俊臣は驚いたふりをして、

「どうしてそのようなことを思いましたようか」。

「罪人は憎むべきだからか」。

来俊臣は一層驚いたように、

「罪人が嘘を言うか、真実を言うか、それを見抜くのが恐らくここでの仕事と心得まして、ただそれだけを思っております。憐れみも憎しみもありません」。

周興はうなずき、衛彦忠が褒めそやす。

実のところは、罪人のことなど考える余裕はないのだ。周興に従順であろうと努めるだけでとりあえず精一杯である。

周興の後ろに付いて歩く日々が一ヶ月余り続く。

「今度はきさまがやってみろ」。

ある収賄事件を任される。

獄から引き出されてきたのは若い真面目そうな官人だ。震えながら容疑を否認する。その様子に普通の人間なら同情したくもなるだろう。

あえて手厳しく、石頭の装置を使う。岩の下ですぐに観念し、全てを認め、年  
老いた母がいるからと、泣いて憐憫を請う。来俊臣は耳に入れない。脇でじつと  
衛遂忠が見ている。

その官人に賄賂を贈ったときせる人物を糾問する。初老の痩せた男だ。最初は

やはり否認して、相手の官人とは会ったこともないと言う。

「全てわかっている。素直に認めればよし、お上に手間を取らせると、罪がより重くなるぞ」。

来俊臣の脅しに、男は顔を真っ赤にして、さらに強く否認する。

男を石頭の岩に下に据える。それでも否定し続ける。しばらくの間、言わせておいて、一本の縄を切る。男の脇に岩が落ち、床が揺れる。男は体をすくめ、自分の上の岩を見て、自供を始める。

下吏が訊問の詳細を記録し、取り調べの書類も整えてくれて、これでいかなる刑罰を適用すべきかを周興に尋ねる。

「任せると言ったではないか。わしに面倒をかけさせるのか」。

来俊臣は謝る。

「あれを覚えたのだらう。あれに全て書いてある。もう一回、暗唱してみろ」。

来俊臣は日々練習しているからすらすらと唱える。衛遂忠から教わった通りに事が運んでいる。

「どうだ、それでわかっただらう。まだわからないのか。明日までよく考えてくるのだな」。

来俊臣は引き下がって、翌日、同じようにしてもう一度、周興に尋ねる。そうするのがよいと衛遂忠より教わったからだ。

周興はまた暗唱させ、

「これでわからないようなら、よほどの愚か者だ」。

来俊臣は叱責される。

その翌日も尋ねると、三度目にして、周興は初めて書類に目を通し、

「これほど簡単な事件なのに、どうしたらいいのかわからんのか。いままで何をやっていたのだ」。

ふりふりしながら、

「おまえはどのような刑罰を与えたらいいと思っているのか。まさか何の考えもないのではあるまいな。いいから言ってみろ」。

来俊臣は困り切った顔で、軽めの刑を告げる。

「それではだめだ」。

周興は聞こえぬくらいの低い声で、憐憫を請うた官人にはまことに気の毒な刑を宣告する。来俊臣は深々と頭を下げる。

衛遂忠に段取りを確認し、下吏を呼んで、この件に関する上奏文を作成させる。

極刑の場合は武太後の裁可が必要である。裁可が下れば刑を執行する別の部署に

罪人を渡して仕事は一区切りとなる。

索元礼に呼ばれる。

「初回は無難に終えたようだな。周君に聞いたのだから、こうするよりない。だがな、最初にわしが言ったのを思い出せ。一人よりは十人、十人よりは百人、百人よりは千人と、多くの罪人を片付けるのが我等の仕事だ。周君の気を損ねぬよう気をつけつつ、うまくやってくれ」。

それより来俊臣は詮議の数を重ねる。

——絶対に失敗しない。俺は特別に選ばれたのだ。何と少しでも正式の侍御史になつてみせる。

来俊臣は、自分でも驚くばかりの精勤ぶりで、ほとんどの時間を御史台で過ごす。町に粗末な部屋を借りたのだが、大抵は役所に泊まる。することはいくらで

もある。学問を嫌ったのをいまさらながら後悔する。御史台でよく使用する文字くらいは憶えなければと朱南山に手ほどきを受ける。周興と索元礼にはとにかくを遣う。いくら武太后によって特別に見出されたとはいっても、二人に睨まれたら終わりだ。それに衛遂忠のような下吏とも十分にうまくやっていかなければならない。罪人の詮議は下吏たちの前で行う。下手なことをして周興や索元礼に告げ口されては適わない。

御史台で大事なものは、索元礼が言っていた通り、数だ。どれだけの罪を明らかにして、どれだけの罪人を裁いたかが、すなわち武太后に対する忠節の証である。罪人が自供しなければ詮議は滞る。速やかに自供させる工夫をすれば、成果は確実に伸びる。賭場で稼ぐのと違って、地道な努力をすれば必ず報われる。罪人が呵責を加えられて泣いたり叫んだりするのは、それは犯した罪の為せるわざであ



つて、速やかに自供すれば苦痛は簡単に避けられるだけの話である。

来俊臣は、罪人の苦悶にははなはだ無頓着である。そもそも御史台に連れてこられるのは主に官人や将士で、いずれも人に上に立って偉そうにし、あるいは裕福に暮らしてきた連中ばかりだ。貧窮の底で這いずる者に対して一片の同情すら寄せたことなどなかったに違いない。そのような者に心を動かすべき理由はない。「さすがでございませぬ」。

来俊臣が罪人を刑場に送り出すたびに衛彦忠が褒めそやす。

来俊臣が着々と数を稼いでいくので索元礼は機嫌がいい。周興は少し違って、数だけでは満足しないところがあるようだ。この世の最も美しいものを極めようとするかのように仕事に打ち込んでいるのである。

**来俊臣**は試用期間を乗り切って正式に侍御史に任命される。いきなり五品官である。

——やっぱり俺は特別に見出されたのだ。

衛遂忠がいつもにも増して世辞を並べる。

「まことに、悪より正に返った者が何よりも強いとは、旦那様のことでございますな。あつしはもう旦那様を一目拝見したときから、他の人とは違うと思ったのでございます。だから、そのように申したのでございます」。

実際に来俊臣の評価は高く、先に武太後の前で名を上げた四人を洛陽に呼ぶことが許される。

真先に長安から弟分の来子珣がくる。「兄貴」と泣きながら飛びついてくるのを期待して待っていたのだが、遠くにかしこまって、ひたすらへこへここと頭を下げ

ている。

「もつとこつちにいい」。

来俊臣が呼んでも、出世を祝う言葉を堅苦しく並べて動こうとしない。

思えば、天下の侍御史と一介の庶民ではこのようなものであろうかと、長口上  
が終わるまで辛抱して待ち、

「覚えているか。おまえにいい目にあわせてやると言った。どうやらそれが叶い  
そうだ。おまえも一緒に洛陽で働くようになればいずれはきっと五品官だ」。

大きな声で笑う。

来子珣は顔を伏せたまま、

「私などはとてもでして、五品官などは夢にも思いません。とにかく、こうまで  
御立派になったのが嬉しくてならなくて、御祝辞を申し上げたくて、それだけな

のです。私などはとてもとても」。

「どうもよそよそしくていけない。昔のようにしてくれて構わないのだぞ」。

来俊臣は手を指し伸ばし、

「顔を上げて、俺に見せてくれ」。

来子珣はかえって身を低くして退き、

「お偉くなられたのをお祝いしたいだけでして。それだけのためにこのこやっ  
てきたのです。とにかくお祝いを申し上げることができればそれでいいのであり  
ます。そのように思いますのは何も私ばかりではないのであります。そうなので  
す。私ばかりではないのであります」。

妙におどおどしている様子に、

「そう言うのは、もしかして、ほかに誰かいるのか」。

「そうなのです。私ばかりではないのであります」。

「誰か連れてきたのかい」。

「はあ、実は、とにかく、そうなのです」。

「はつきりしないものの言い方だな。何だ、俺に会わせにくい相手なのか。長安からわざわざ連れてきたのか。だったら、遠慮するな。俺とおまえの仲ではないか」。

来子珣はふうつと息を吐き、

「本当でしょうか。怒ったりなさらないでしょうか」。

「俺が怒るのか。おまえにそんなことをするはずがない」。

「本当でしょうか」。

「おまえと約束したことは必ず守る。だから呼んだではないか。誰とでも機嫌よ

く会うぞ」。

来子珣は畏まって頭を下げ、外に飛び出し、そして連れてきたのは二人の男女。四人が一緒になって床に這いつくばる。

来俊臣はそれを見てぎよっとし、にわかには腹の内が熱くなる。

——俺は怒らないぞ。

弟分との約束を守ろうとする。

兄と弟、それに妻だ。三人が震える声で何やら意味を為さぬ言葉を並べている。

来子珣がそれに言葉を添えて、

「いろいろとお腹立ちとは思いますが、どうか広いお心で許してはいただけないでしょうか」。

急に可笑しさがこみ上げてきて、来俊臣はけらけらと笑う。

——この俺を怖がっているのか。

世の中というのは馬鹿馬鹿しいほど単純明快である。来俊臣が侍御史様になれば、過去に何があっても三人は床で平身低頭だ。

「よくぞ忘れずにきてくれた。嬉しく思う。礼を言うぞ」。

笑いながら、太っ腹なところを見せつけておこうと、兄弟に向かっては洛陽での職を斡旋してやろう、妻に向かっては復縁を許そうと、言葉を並べる。

「有難き幸せにございます」。

三人はただひたすらに頭を下げる。

来俊臣は盃を持ってこさせ、

「思いがけず皆と会えてこれほど嬉しいことはない」。

尻込みする四人に盃を取らせる。来子珣は初めて顔を上げる。長安の檻樓小屋

でのことが思い出され、来俊臣の目より涙が落ちる。来子珣も泣く。

「さあ、飲んでくれ」。

四人はどきまぎしながら、言われるに従って酒を口にする。

「これから仲良くしてくれ。天下に兄弟は三人だけ、妻は一人だけなのだから。来俊臣は機嫌よく言うのだが、四人は何やらもごもご言ってそそくさと辞去する。

惘然として目送し、

——何しろ五品官だから、ぎこちないのも仕方あるまいか。俺が本当に鷹揚であるところをよくよく見せてやらねばなるまい。

翌日、四人はもう一度くると、すぐに長安に帰ると言う。

「洛陽にきてたった一日で帰るのか。それはいかん。あちこち案内してやりたい」。



兄と弟と妻が身を縮める様子に、来俊臣は悲しくなる。

——俺を怖がっているのか。仕返しされるのが怖くて、とにかく謝りにきたのか。

俺はそのような愚劣な男ではない。

「まあ、待て」。

来俊臣は、これまでもらった俸給をそっくり兄と弟に与え、

「いまはこれしかない。長安に帰るのなら、後日、もつと送ってやろう。兄弟の

よしみ、以前に世話になった礼だ」。

そして、妻に優しく言葉をかけ、

「そなたとはいまも夫婦である。しばらくの間は別々だったが、おまえの他に妻とした者はいない。夫婦は一緒に暮らすものだ。これまでそれができなかったのは俺がいけなかった。あのころおまえは勉強しろとよく言ってくれた。その通り

にしていればよかったと、何度後悔したかわからない。これからも、あのころと同じように、俺に厳しい言葉をかけてほしい。頼む」。

自分の言葉を、来俊臣はまことに自分の心から出たものであると信じている。

——あの非情な男と俺は違う。

母を棄てた父を思い、すつと立って妻の手を取る。

「どうか俺と一緒にいてくれ」。

そのように言うと、涙が出てくる。

妻は震えつつ、

「おっしゃる通りにいたします」。

来俊臣は自分のしていることに満足する。

次に来子珣に向かって、

「おまえのことを思わぬ日はなかった。どうか、いままで通り、兄貴と呼んでくれ。さあ」。

来子珣はためらいがちに、

「兄貴」。

一度つぶやいて大声で泣く。

**来**子珣は、それからしばらくの間、来俊臣夫妻の新しい住居を整えるために忙しく動き回る。五品官にはそれにふさわしい住まいがあつてしかるべきだ。

郭弘覇、王弘義、侯思止も順次洛陽にくる。

郭弘覇は舌先三寸で生き抜いてきた男だ。普通はあり得ない話も、郭弘覇が言うとうと真実に聞こえる。王弘義は喧嘩に滅法強い男だ。胡人の索元礼には一步譲る

ものの、罪人を震え上がらせるに十分な面構えだ。侯思止は表の商売の餅屋としてはまことに腰低くて如才ない男であるが、裏に回って闇の仕事をするときの悪知恵には恐るべきものがある。

来子珣ら四人は御史台で働くことになり、来俊臣は、まずは索元礼と周興のところに連れる。

「とにかくここ御史台においてはあの二人に絶対に従わなければいけない。そうしなければここには入れられない。あの二人に気に入られさえすれば、いずれ俺と同じように五品官になれる」。

索元礼も周興も、来俊臣が初めて御史台にきたときと同じに扱う。周興が課す法規の暗唱を、学問の下地がある来子珣は真先に楽々合格するが、一文字も読めない侯思止にひどく難儀する。

その侯思止が来俊臣にそつとささやく。

「あれは油断がならない。これくらいしておけば十分だろうと思つても、その倍はしておかなければ。それでも足りるかどうか」。

衛遂忠のことだ。侯思止は折りあることに衛遂忠に金品を与える。さらに郭弘覇が何かと言葉で持ち上げる。衛遂忠が得意の世辞を言うよりも前に、郭弘覇の方が褒めまくるのである。衛遂忠をすっかり手なずけてしまうと、周興のことが全て筒抜けになり、いつが機嫌が良いのか悪いのかも手に取るようにわかつて、はなはだやりやすくなる。

周興は初めのうちは来子珣を見込みありとしていたのだが、十日ばかりもすると、

「あのさまで役に立つのか」。

来俊臣に苦言を呈する。

それは来俊臣も感じていた。来子珣は次第に落ち着きを失い、妙にそわそわしているかと思うと、じつと片隅でうなだれていたりする。

周興には、

「必ず鍛えて御覧に入れます。もしもどうにもならない場合は某が厳しく処分します」。

と答えつつも、弟分には穏やかに、

「どうした。ここの仕事は苦手なのかい」。

来子珣は顔を赤らめ、

「いいえ、滅相もない。兄貴のお蔭でこんなにも立派な仕事に就けて、これ以上嬉しいことはありません。心配させてしまつて申し訳ありません。必ず頑張つて

みせます」。

しかし、いつまで経っても仕事に馴れそうもないので、来俊臣は弟分のために思案を巡らし、大きな計画を思い付く。これぞまさしく、「悪に強いは悪」と武太後の前で言ったことの完全な証明になるだろう。

来子珣に言う。

「おまえの仕事を考えて。網を作ってくれ。ごく目の細かい網だ。それを、この洛陽から片田舎のごく小さな町まで、全国隙なく張り巡らしてくれ。それで、告密の種を一つ残らず掬い取る。一つの種があれば、十倍、百倍に膨らみますのはたやすい。網目には世の無頼漢どもを置けばいい。今日から早速取り掛かってほしい」。

来子珣は慎重に準備し、まずは洛陽で試す。世のあぶれ者にお上の御用を授け、

街の辻々で民衆の声を聞き取らせる。これまでは誰かが「告密の門」を叩くのを待っていたのに対して、こちらから拾い集めるのだからその効果は大きい。

来子珣は、洛陽の次には長安に、そして他の町へと網を巡らしていく。網が広がるにつれて、御史台に連れてこられる罪人は確実に増加する。何よりも数を重視する索元礼は喜ぶが、周興が不愉快そうにしているのが衛遂忠を通じて聞こえてくる。大きな事件はそれとなく周興に回すようにする。

武太后は網をすこぶる高く評価する。

——俺は他の者とは違う。呼ばれて洛陽にきたのだ。

来俊臣は秘かに自信を深める。

その一方で、世間からは、羅あみをめぐるして罪を織る、「羅織らしよく」の徒として来俊臣らは忌嫌されるようになる。



**来**子珣は全土を飛び回ってよい働きをしながらも、御史台に戻ってくるとやはり元気がない。

ある日のこと、きまり悪そうに切り出す。

「兄貴、俺たちはいいことをしているのでしょいか」。

「わかってる、世間の評判が気になるのだろう。おまえは思慮深いのはいいのだが、人に左右されやすいところがある。世間の奴らには好きに言わせておけばいい。俺たちのために、この洛陽だけでも、何十も何百もの家が破滅した。その連中が俺たちを嫌うのは当たり前のことだ。俺たちは好んで連中を破滅させたのだから。違うだろう。連中はもともと国に対して悪いことをしていた。破滅して当然なのだ。俺たちは、お上から授かった大事な仕事をしている。それが正しいのを

疑ってはいけない」。

「わかっています。でも、心配なのです」。

「何がだ」。

来子珣は口ごもりつつ、

「長く続けていけるものなのか」。

「世間から俺たちは嫌われている。だから、そのうち俺たちが獄に叩き込まれてしまうのではないかと心配になるのか」。

来子珣は黙って顔を伏せる。

「大事なことを言うからよく聞け。罪人にとって、死を与えられるのはむしろ不幸であるに違いない。昨日まで栄華を誇っていた人物が突然処刑されてしまうのを見て、世間の連中が気の毒に思うのも無理はない。だが、俺たちは、もっと広

くものを見なければいけない。一人の罪人に不幸が与えられることで、気が付かぬかもしれないが、何百、何千、何万の者の幸いが実は生まれているのだ。いいか、もしも天下が乱れたならば、何万、何十万の人間が戦乱に巻き込まれて死ぬ。俺たちは何事も起こらぬうちにそれを消している。世間の連中にはそこが見えていない。もう少しわかりやすく言うのだ、不埒なことを企む者が一人消えれば、そいつの屋敷が空になる。そこに今度は新たに、皇太后様のため、天下のために本当に尽くそうとする人間が入る。泉から淀んだ上積みを捨て、下から綺麗な水を汲み上げてやれば、泉全体が綺麗になる。俺たちはそのようなことをしているのだ。どうだ、少しはわかったか。

来子珣は小さく、

「そこまで考えが及びませんでした」。

「人間誰しも目の前のことしかわからぬ。拷問に苦しむ声を耳にすると、つい気が挫け、許してやりたくもなる。それは罪を見逃し、悪に加担することだ。罪人どもは平生から多数の人々を虐げている。思い出すがいい。俺たちは長安でも洛陽でも、大変な目に遭ってきた。罪人どもは俺たちの苦しみの声を一度だって聞こうとしたか。俺たちは、拷問に苦しむ罪人の声ではなく、民衆の苦悶の声にこそ耳を澄まさねばならない。御史台の仕置き場にながらも、大きな天下を思つて働かねばならないのだ」。

「さすが、兄貴は考えることが違います」。

「世間の連中に惑わされるな。何の心配もない。俺たちは皇太后様に尽すことだけを思えばよい。皇太后様が俺たちにこの仕事を与えてくださったのだから」。

来子珣は得心したような顔をするものの、来俊臣は、弟分に無理は続けさせら

れまいと感じる。

世間の評判を気にする者がもう一人身近にいる。妻だ。妻は世間の目を怖がって屋敷から一步も出ようとしない。世間だけでなく、夫にも怯えていつもおどおどとしている。来俊臣ははなはだ不満である。以前通りに叱ってくれていいと言ったのに、そのようなことは一度もない。

妻がひたすら従順に仕えて、目前の平穩を得ようとしているのが面白くない。

——俺は違うのだ。どうしてわからないのか。

**武** 太后より新たな任務を授けられる。宮城の麗景門の奥に新たな獄、推事院が設けられ、その運営を任される。推事院は全土の網を束ねる大きな組織だ。

来俊臣は、自分には武太后の特別な視線が注がれていると確信する。そうでな

ければ、博徒だった男のために推事院を作るようなことはしないだろう。

推事院の主たる顔ぶれは古くからの仲間で固める。武太后は一人ずつ検分する。王弘義は一段と増した凄みで、郭弘霸は流れるような弁舌で、来子珣は礼に適った振る舞いで、それぞれ無事に諮問を終える。

侯思止は武太后に問われる。

「字が全く読めずに侍御史が勤まろうか」。

餅屋の侯思止はいまだに一文字も知らず、すでに幾つかの失敗をしている。

「畏れながら申し上げます。獬豸かいちは字を知っていきましょうか。それでも、必ず邪なるものを見分けると聞きます」。

獬豸は、邪言を聞くと吠え、邪人を白日のもとに曝す獣だ。

武太后はその言を気に入り、没収したある罪人の邸宅を与えようと言う。

「反逆者が住んでいた家に入ったのではこの身が汚れます。いまの狭い家で十分です」。

侯思止も合格し、揃って五品官になる。

来俊臣は、武太后に厚く信頼されているとさらに強く感じる。

——これも母であると慕う心があるからに違いない。

これまで以上の成果を挙げて、母の愛に応えようと努める。索元礼や周興は上官から競争相手になる。推事院を御史台と別に設けて意味があつたと、武太后に認めてもらうには数で勝るだけでは不十分で、御史台にはできない推事院ならではこのことをしなければいけない。

推事院の強みは来子珣の網だ。網を活用して、複数個所で同時に告発して、一挙に多数を捕縛する方法を考案する。一見すると関係なさそうな幾つかの事件が、

実は複雑に絡み合った巨大な一つの犯罪であることを明らかにして、世間を驚かせる。

事件処理の効率化を進める。これまでの流れは、獄に連れてきた罪人を取り調べ、自供させて事件の詳細を明らかにし、罪が極刑に相当するときには、証拠を揃えた文書を整えて武太后の裁可を仰ぐというものだ。もとより罪が明々白々であるのならば、取り調べを始めるのと時を同じくして武太后に裁可を仰いでも結果は同じになる。罪人が白状するところに裁可が下っていれば、獄はすぐに空いて次の罪人を入れられる。

武太后の裁可が早々に下りて、罪人がいつまでもしぶとく認めないようだと少々具合が悪い。取り調べを完璧にすべく来俊臣は責め具を研究し、十種の枷を作製する。定百脉じょうひやくみやく、喘不得ぜんふとく、突地吼とつちこう、著即承ちやくしやう、失魂膽しつこんたん、実同反じつどうはん、反是夷はんかじつ、死猪愁しちよしゆう、



求即死、求破家と名付け、この順に苦痛が激しくなる。最後の二つは枷を見たただけで「すぐに殺してくれ」「一族を皆殺しにしてくれ」と叫ぶほどに恐ろしい装置だ。驢駒拔擲、仙人献果、玉女登梯などの新工夫も怠らない。身体を不可能な形に折り曲げたり、膝を折った下肢を紙のように平たく薄く潰したり、飴のように身体を長く引き伸ばしたりする拷問である。

推事院は羅織の組織として高い完成度に到達する。それでも、組織を運営するのは人であるから、誰が詮議を担当するかで罪人の扱いに相違が生じるのはやむをえないところだ。苦痛を味わう時間が最も短くてすむのが王弘義だ。短気で怒りやすい王弘義は、狙い通りに即座に白状しないと、手加減なしに責め具を用いて命を絶ってしまうことがある。それはしてはならぬと来俊臣が最初に索元札に言われたことだった。王弘義が扱う罪人はいずれも斬罪と決めて書類を作成する

ようにする。拷問中に罪人が死んだならば、武太后の裁可に従って死骸を斬ればいい。王弘義は、推事院の門を、麗景門と音が通じる例竟門と呼ぶ。この門から入れば命運が竟ためしきるのが例だというわけだ。

**こ**の時代に、御史台で侍御史を務めていたのが、索元礼や周興、あるいは来俊臣のような者ばかりだったわけではない。元来、侍御史が最も留意すべきは冤罪を生まぬことである。その基本に忠実であろうとする者の一人が徐有功だ。獄に連れられた罪人は、詮議を担当するのが徐有功であると知ると、これで生きて出られると涙を流す。

周興は徐有功を毛嫌いし、私情を差し挟んで手ぬるいと、武太后に讒言する。ざんげん

武太后は徐有功を呼び、他の侍御史に比べて処罰した罪人の数が極端に少ないと

厳しく叱る。徐有功は、詮議した件数は大差なく、調べた結果無実となったのが多いのだと、それらの案件について逐一弁明する。武太后はそれが理に適っていると認め、徐有功は侍御史の地位を保つ。

徐有功ほどではないが、そこそこの見識を有して実務に長けた傳遊芸ふゆうげいなる者がいる。武太后は傳遊芸を御史台から引き抜き、別のより重要な使命を与える。

来俊臣は、来子珣を傳遊芸の助手にしてほしいと武太后に願い出る。

「兄貴と離れたくありません」。

弟分は心細がる。

「俺はおまえをよく知っている。おまえにはあっちの方が向いている。おまえが作った網が必ず役に立つ」。

武太后は、誰も口に出せない難問と闘っている。迫り来る老いだ。老いは二つ

の意味で深刻である。一つは容色の衰えだ。絶世の美人であったからこそ太宗、高宗の二代の皇帝に愛された。己の若さと美が失われゆくのは耐え難く、若く美しい男を身近に置いて、その生命力を得ようと努める。近頃の寵愛の相手はかいぎ懷義という僧だ。

その秘事を、つい先さきごろ、郝象賢がかくしょうけん大衆の前で暴露した。郝象賢は郝処俊の孫で、郝処俊は、高宗が武氏を皇后にしようとしたときに猛反対した一人だ。周興は武太后がいまだに郝処俊を憎んでいるのを知って、歛心を買おうと、郝象賢を罪に陥れた。郝象賢は刑場へと曳かれる間に、武太后と懷義との隠し事を叫び続けた。武太后はその死骸をばらばらにさせ、祖父の墓を暴かせた。以来、罪人を刑場に連れるときには口に丸太を突っ込んで喋らせないようにするのが定めとなった。

そしてもう一つは、人として避けられないものときに、武太后が握っている権力がどのようになるかという問題だ。皇帝に戻るのが普通だ。国として本来のあるべき姿に返るということだ。皇帝の李旦は武太后が生んだ息子であり、先帝の子である。男系社会において子は父の一族に属する。皇帝が権力を取り戻せば、父方の李氏一族は皇族として甦る。武太后に逆らった李氏一族に、索元礼らが大打撃を与えたのに、それが無に帰してしまふ。抜本的な解決策があるとすれば、武太后自身が皇帝になることだ。だが、長い歴史を振り返って過去に皇帝になった女性は一人もない。皇太后として権力を掌握する過程においてさえも反乱が相次いだ。皇帝を目指すとなればどのような抵抗があるかわからない。

傅遊芸と来子珣は、武太后が皇帝に昇る道筋を拓く仕事を授けられたのだ。

**永昌元**（六八九）年九月、周興は、宰相も経験した大物の魏玄同（ぎげんどう）を告発する。

「皇太后様はもう齢も齢だから、先の長いお若いお方にお仕えした方が安心であろう」。

魏玄同が近い者にそのように漏らしたというのが発端で、そこから反逆罪を周興は導き出そうとする。

「これはさすがにやりすぎではなからうか」。

郭弘霸が声を潜めて来俊臣に言う。

「俺もこれはうまくないと感じている」。

「周興殿は、我ら推事院に負けまいと、功を焦っている。相手は朝廷の大物で、もともと太后様によって引つ張り上げられた者だ。その反逆罪を立証すれば、御史台の立場が強まると考えているのだらう」。

郭弘霸は人の心中を察するのに長けている。

「しかし、失敗したら、逆に打撃は大きいぞ」。

「悪い話を聞いた。衛逐忠が教えてくれた。周興殿は魏玄同に恨みがあるというのだ」。

「ほう、私怨を晴らそうというのか。そいつはいよいよよくない。周興殿ともあらうお方が、侍御史の基本を踏み外すとは。我らは皇太后様に忠義を尽くしているのだ。決して私情をまじえてはいけない」。

来俊臣は語気を強める。

「周興殿の気分もわかるころはある。あの人は大した努力家だ。下吏の家に生まれて、普通なら下吏の子は下吏にしかなれない」。

「俺の伯父のところがそうだ」。

「懸命に頑張つて下吏から官人に昇り、河陽県にいたときに、上洛せよとの報せを受けた。いよいよ都で用いられると、期待に胸を膨らませて皇城に馳せ参じた。

同じようにして呼び集められた者には順に昇進の辞令が手渡されたのだが、周興殿だけはいつまで待っても声がかからなかった。いつしか誰もいなくなり、『これはどうしたことか』と途方に暮れていると、『誰だ、そこにいつまでもうろうろしているのは。さつさと出て行くがいい』との罵声に、さすがごと宮殿から出るしかなかった。後になって、その声の主が魏玄同だったと知れた。魏玄同は宰相として辞令を授与する立場にあったのだが、周興殿に渡されることになっていた辞令を直前になって破棄してしまったのだ。

「どうしてだ。魏玄同は周興殿を嫌っていたのかい」。

『清流』ではない者は朝廷に入れたくないということだ。



「ああ、『清流』か。嫌な言葉だ」。

儒学の正統な学問を学んだ者が「清流」だ。周興は下吏の子として実務に役立つ法律を学んだので「清流」ではなくて侮蔑的に「濁流」と呼ばれたりもする。侍御史でも清流派の徐有功などは、法の定めよりも前に冤罪を生んではならないということをおもうのだが、濁流派は法の定めを厳密に運用することこそを重視する。

「どのみち俺たち博徒上がりなどは『濁流』以下だな」。

郭弘覇は笑う。

周興は魏玄同を死罪に陥れることに成功する。

御史台には、清流派の代表格である魏玄同を死なせるのは僥倖ないと思う者もいて、魏玄同に告密を勧める。獄中から誰かを告密し、それが武太后の耳に達す

れば、武太后と直接会える可能性がある。そこで無実を申し述べるならば救われるだろう。

魏玄同は嘆じ、

「非道の告密をせよ私に申すのか。人を無実の罪に陥れ、それで自分が生き延びるなど断じて私はしない。人は必ず死ぬ。人に殺されるのも、鬼に殺されるのも同じだ」。

魏玄同は従容と死につく。

周興はさらに武勲に輝く名将の黒齒常之こくしじょうしを破滅させる。その裏にも私怨があるらしいことを衛遂忠は来俊臣に告げる。

来俊臣は、周興の振る舞いを見て、推事院はより緻密に運営しなければならぬ  
いと考える。

**傳遊芸**と来子珣は民衆運動を展開する。

弥勒仏が地上に現れて衆生を救うという信仰が昔からある。隋朝が滅んだきっかけの一つに、煬帝の圧政に苦しむ民衆が弥勒仏の出現を渴望し、弥勒仏を自称する者が人々を率いて決起した反乱があった。

間もなく弥勒仏が我等の眼前に現れるとの噂がどこからともなく湧き上がり、またたく間に全土に広がる。弥勒仏は女性の姿を借りて現れると口々に言い、そのことを遥か昔に予言した『大雲経』なるものが発見される。民衆は弥勒仏の一日も早い出現を願い、寺院に集まって『大雲経』を朗唱する。全国どの町でもどの村でも民衆は『大雲経』に熱狂する。

永昌二（六九〇）年九月、傳遊芸と来子珣は長安周辺の土地の有力者九百余人を



「どうだ、俺が言うのを聞いていれば間違いないだろう。おまえにいい目を見せてやると言ったことが、これでどうやらできたようだ」。

「何もかも兄貴のお蔭です」。

「俺ではない、お上のお蔭だ。本当に有難い。お上は俺たちのことを全てわかっていてくださる。これからお上のために尽さなくてはならない」。

「本当にそう思います」。

「お上は大したお方だ。覚えているかい、おまえと長安を出たときに、俺は世の中をひっくり返してやりたいと言った。できもしない乱暴なことをただ言ってみただけだった。隋から唐に代わって世の中がひっくり返ったときには、この国中が戦場になった。お上は戦さをなさらずに、唐から周の世に改めた。しかも、女性で初めて皇帝になられた。まさに世の中をひっくり返されたのだ。俺たちはほ

んの少しお手伝いしただけだが、泉から汚い上澄みを棄て去ったことで、下から美しい水が湧き出てきて、泉はこうして一新された。その仕事ができたと誇つてもたぶん悪くはあるまい」。

「汚い上澄みがなくなり、お上のもとで、世の中は万事安泰でありましょう。これからはここにくる罪人も少なくなりましょうか」。

来子珣が晴れ晴れとした顔で言うのを見て、来俊臣は俄かに不安を覚える。

——何だこれは。

すぐにそれを打ち消そうとする。

「昔から、獄が空になるのが泰平の証とされている。お上はそれを望まれている。

おまえは罪人を裁くのが得意ではない。獄が空になれば嫌なことを無理にする必要もない」。

来俊臣は、万事承知しているのだと、自分自身に言い聞かせるように言う。

——俺はお上に呼ばれて洛陽にきた。お上のために尽していれば何の心配もない。

**天**授元（六九〇）年冬、武皇帝の即位から三カ月もしないうちに、御史台は新たな事態に直面する。

周興がある罪人を調べ、一族を誅すべきだとして武皇帝に裁可を仰ぐ。武皇帝は徐有功に調べ直させ、結果として無罪になる。

周興は、徐有功がその罪人と繋がっていて、不正な取り調べをしたと弾劾する。武皇帝は徐有功を免官にする。周興は勝利を喜ぶ。

ところが、日を置かずして、武皇帝は徐有功を呼び、御史台への復帰を命じる。徐有功は地に伏して涙ながらに辞退する。

「臣は法官として陛下の法を曲げることができません。されば、侍御史の官にいて必ず死ぬことになりましょう」。

「そなたを死なせるために朕はそなたを御史台に戻すのではない」。

武皇帝の一言で、周興は徐有功に対して手出しできなくなる。

天授二（六九二）年一月、御史中丞の李嗣真りしんが、侍御史が刑罰を専決する現在のやり方は元来の法の運用に背いて冤罪を生む恐れが大で改めるべきだと上疏する。御史中丞は侍御史の上官であるが、これまでは周興らのすることに口出しできなかった。李嗣真の上疏が通れば、御史台の仕事は根底から覆ってしまう恐れがある。武皇帝は却下する。

丘神勳が処罰される。丘神勳は武太后に命じられて皇子を死に追いやった功績で高い地位に昇ったのだが、貪暴な振る舞いがありにも多く、武将仲間に告密



されて死刑を宣告される。丘神勳は索元礼や周興のかつての盟友で、二人は救おうとするが叶わない。

武皇帝の手綱さばきは単純ではない。

周興はじわじわ追い込まれつつあると感じているのだろう、いつも機嫌が悪く、腹いせに衛遂忠に罵声を浴びせる。衛遂忠は推事院にきては、周興がぴりぴりしているありさまを、さも滑稽なことであるかのように語る。来俊臣はそれを聞いて笑う気にはなれない。御史台と推事院は微妙な関係にある。

来俊臣がある者を反逆罪で調べていると、御史台に属する史努滋しぬじから横槍が入る。告発の証拠が薄弱で冤罪が疑われるというのだ。

王弘義が激怒する。

「李嗣真に尻尾を振って、生き延びようというのだ。史努滋は仕事がまずくて周

興殿と仲が悪い。この際、推事院も周興殿も一緒くたにして葬り去ろうというの  
だろう」。

来俊臣は強く反撃する。史努滋はもともとその罪人と親密な関係があつて、法  
を枉げようとしていると、武皇帝に訴える。

来俊臣は武皇帝に呼ばれる。

「何故にここにこさせたのかわかつておろう」。

来俊臣は即座に察する。来子珣に言った通りだ。獄が空になるのが泰平の証だ。  
武皇帝は泰平の天子であろうとしている。

——俺の役目は何か。

「法に忠実であれとの御垂訓を頂戴するためと存じます」。

「その通りだ。特に推事院はそうではなければならぬ。そのために朕は推事院を

設けた。何をもって法に忠実とするのか申し述べてみよ。」

来俊臣は、徐有功や李嗣真の主張をそのまま援用して述べ、徐有功が武皇帝の前で言ったのと同様のことを言う。

「臣は法官であります。法を守る故に推事院において必ずや死にましよう。臣に嫌疑が掛けられているのは、すなわち臣の死を待つ者がいるからであります。」

「それは何のことだ。」

「世の中が静まり、近頃はややもすると侍御史のなかに懈怠がみられるようになっております。はなはだ遺憾なことがなきにしもあらずです。臣が死ねば、そのことを明らかにしようとする者がいなくなりましよう。」

「何が問題なのだ。はっきりと申してみよ。」

「収賄ごうざいます。」

衛遂忠を通じていくつかの確かな事実を掴んでいる。告密を恐れ、侍御史をあらかじめ買収しておこうとする者は以前から少なくない。

武皇帝は激怒する。

真先に史努滋が詮議の対象となる。史努滋は自殺する。

来子珣が真青になって来俊臣に告白する。気の弱い来子珣は収賄の誘いを断り切れなかった。

「そうか。わかった。となると、おまえを守るため、荒療治をせねばなるまい。向こうにやられる前に、先手を取らねばならない」。

——事がここまできては、推事院を犠牲にして御史台が生き残るか、御史台を犠牲にして推事院が生き残るかだ。周興に先を越されるよりも前に。

告密の争いである。

**あ**る春の午後、来俊臣は周興を酒宴に招く。周興は、衛遂忠を従えて、苦虫を噛み潰したような顔で現れる。

「何だ。わしにどうしたいと言うのだ」。

周興は落ち着きがない。衛遂忠から聞いていた通りだ。

「昨今の風潮に、ご心労も多かろうと思ひまして。たまには気晴らしもよろしいのではないでしようか」。

「他人事のように言うな」。

「我等ほど報われない者はいません。これだけ世の中のために尽しているのに、少しも認めてもらえないどころから、憎まれてもいるのですから」。

来俊臣は世を嘆きつつ盃を勧める。追従を得意とする郭弘覇が同席し、口の巧

みな衛遂忠も加わって、周興を気分よく酔わせようとする。

頃合いを見て、来俊臣は、

「実は」。

と、切り出す。

「やはり何かあると思っていた。わしにこれだけ酒を飲ませて、ただではすむまい。何の頼みだ」。

「他でもありません、昨今の風潮に困っております、御指導いただけませんか。以前は某も同じ御史台におりましたからいつでもお教えいただけたのですが、役所が離れてからはそのような機会もなくなり、某一人ではなかなか考えが及びませんので」。

「今や泣く子も黙る推事院ではないか、困ることなどあるまい。だが、教えを請

われて嫌な顔をするわしではない。遠慮なく言ってみろ。」

「困っておりますのは、近頃の囚人の口の堅さです。何しろ、我等が音を上げるまで強情を通せば、そのうちきつと徐有功あたりに回されて、助かると思つていられるようなのです」。

「そのことか。全くもつてそうだ。徐有功は、黒を白にし、罪人どもにいい顔をし、世間の人気を得ている。まことに怪しからん」。

「梃子でも口を開かぬ奴輩をどうにかしないとならぬのですが、もう智慧が尽き果てまして」。

「推事院にはいい道具が揃っておると聞いているぞ」。

「そこが昨今の風潮で、世間の目に触れて具合の悪いような道具は使いにくいのでございます。博徒の子は所詮博徒でございますな。推事院は重すぎる役目です」。

て、これ以上行き詰まりしては、郷里に帰るよりなかるうかと思っております。  
来俊臣はがつくりと肩を落としてみせる。

「そうか長安に帰るのか。それもよかるうな。ただし、おまえを普通の博打仲間と見てくれる奴がいるならばだ」。

「生まれた町ですから、知り合いは大勢おります」。

「一度は羅織に携わったおまえを、誰が昔と同じと見るものか。一体全体、おまえを憎む者が世の中に幾人いるか数えてみる」。

「某は職務を忠実に果たそうとしてきただけです」。

周興は大笑し、

「世間の連中がわしらのことをどう言っているのか。罪人の爪を一枚一枚剥がすたびに快感にわしらは打ち震えている。罪人を一人出せば財産がどれだけ増える



かとわしらは勘定している。どのような小さな遺恨もお上の威光を借りてわしらは必ず晴らしている。わしらはただただ自分のためにしているのだ。そのようなわしらが今日この仕事を辞めて、明日から普通にお付き合ってくださいと言って、誰が聞いてくれるものか。ここを出たが最後、おまえは長安に着く前にずたずたにされてしまうだろう。最初の日には索元礼様がおまえに言ったのを忘れたか。この仕事は始めたが最後、辞めるのは死をもつてするしかない、そう聞かなかつたのか」。

来俊臣は頭を下げ、

「確かに伺っております。しかし、その意味が全くわかっておりませんでした」。

「長安に帰るとか虚しいことを思う暇があったら、罪人を一人でも多くする工夫をするのだな」。

「それができなくて困っているのです」。

「仕方のない奴だ。何かのときには使ってみようと用意している方法が一つあることはある」。

周興はにやりとする。

ずっと手もみしながら脇で聞いていた郭弘覇が立ち上がり、

「いい方法があるのでございますか。あるのでございますか。これはぜひお聞かせいただかなくては」。

囃し立てるように言い、すぐに床に伏せ、

「どうかお教えいただけませんかでしょうか」。

周興は盃を煽り、

「そこまで頼まれたら仕方あるまい。罪人を傷つけぬいい方法だ。道具も一つ

だけ、まことに簡便でごくおとなしやかなものだ。残虐な気配は何もない。世間体もまことによろしい」。

郭弘覇は中腰で、

「何を用意すればよろしいのでありましょうか」。

「大きな甕だ」。

「甕でございませうか。甕でございませうか」。

驚いたように手を打つ。

来俊臣は横の衛遂忠に目配せをする。すでに聞いていた通りに話が進んでいる。

「いいか人がすっぽり入るくらい大きな甕だ。その四周に炭を置く。火をばんばんおこす。甕が真赤になって、ぐらぐらと湯が湧いたら、罪人を上から吊るし、

甕の口へとじわじわと降ろす。ゆっくりやった方が効果が大きいだろう。熱い湯

気で十分に蒸してやり、つま先が少しでも湯に入ったら、頑張り通そうとする剛の者はそうはいまい」。

「それはたまりませんな」。

郭弘覇が身もだえする。その脇から衛遂忠が忍び出て、入れ違いに数人の獄卒が足音高く踏み込んでくる。

笑っていた周興は、

「何だ、騒々しいではないか」。

来俊臣は身を翻し、獄卒たちの後ろ回る。

衛遂忠が戻ってきて、周興の顔先に一片の命令書を突きつける。

「何の真似だ」。

郭弘覇が答える。

「丘神勳と通謀していた罪で獄に連行する」。

「馬鹿な」。

獄卒を突き飛ばし、壁際から抜け出ようとする。

衛遂忠が手練の技で周興を床に転がす。

「お静かにしていただきましょう」。

周興は来俊臣を見上げ、

「貴様がこれを仕組んだのか」。

来俊臣は顔を背け、

「お好みの真赤に焼けた大甕をあちらに御用意してあります」。

周興はそれを見るまでもなく罪を認める。抵抗するのは無意味であることを、周

興は最もよく知っている。

周興の罪は死刑に相当するところを、これまでの功績に免じて武皇帝は特に赦して流罪にする。しかし、流される道の途中で、周興が予言した通り、仇とする者の手で殺される。

続けて、索元礼も獄に繋がれる。頑として罪を認めず、豪胆にも、

「鉄圈頭籠を持ってこい」。

と自ら指示し、自分が発明した責め具によって死ぬ。

周興と索元礼の死に天下の人々は快哉を叫ぶ。

来俊臣は、朱南山の力を借りて『告密羅織経』を編む。索元礼や周興とは一線を画して、推事院は正義を踏み行う場であることを高らかに宣言する。「義をもつて罪を織るは忠の至り」と謳い上げる『告密羅織経』は武皇帝に絶賛される。

推事院の絶頂期である。

## 後篇 虚妄の囚

わずか一瞬の後に、恐るべき勢いで坂を転げ落ちる。

周興と索元礼は、残念ながら、人々の憎悪の全てをあの世へと持ち去ってはくられなかった。二人を死に追いやった来俊臣こそが最も悪辣であると、天下の憎しみは推事院に集中する。

来俊臣の思惑通りに武皇帝の裁可が下りないことが度重なる。刑を軽くするよう、あるいは、再調査をするよう命じられる。

「兄貴、我々もきつと同じになつてしまふのではないのでしょうか。」  
来子珣は心の底から怯えている。

「あの二人と俺たちは似て非なるものだ。推事院は違ふ。推事院は正しいことを

してきた。もちろん世の中はいつも同じではない。推事院もそれに合わせて変わっていかねばならない。俺は先を見ている。万事承知している。心配するな」。

——俺は違う。

頼みは武皇帝の心である。

武皇帝は推事院に変化を求めているのは間違いない。それはわかっている、すぐに打てる有効な手立てが見出せない。

推事院は組織としての完成度が高い。それだけに変えるのは容易でない。推事院を推事院たらしめているのは巨大な網だ。網がなければ推事院は機能しない。網を維持するために多数の無頼漢を養っている。推事院は必然的にある一定数以上の罪人を常に確保し続けなければならない組織なのである。

来俊臣にはここまで這い上がってきた強い自負がある。いつでも事態を適切に



見通していると思いたがり、その気分を衛遂忠の佞弁ねいべんが支える。

衛遂忠は前の主人を死なせて推事院に移ってきた。衛遂忠はうっかり心を許せぬ男であると警戒しつつも、急所を突いてくるその言葉についついうなずいてしまふ。

「旦那様は苦勞人でございますからな。他の方とは訳が違います。どのような困難も切り抜けるお知恵がございます。それに、旦那様は人情というものがよくわかっておられます。それもやはり苦勞人だからでございます。他の侍御史とはわけが違います。旦那様ほどお心の温かい方はおられません。身近に置かせていただいて、日に日にそう感じておるのでございます」。

世間は羅織の臣を憎んでいる。「しかし、俺は違ふぞ」と世間に言つてやりたい思いが来俊臣にはあつて、そのことを衛遂忠はよく承知している。

——冷酷無情の男なら、俺に誰もついてこない。俺には弟分や仲間がいる。それに女たちだつて。

来俊臣の屋敷には、近ごろ多数の女性が住むようになってきている。

妻との間に子はなく、五品官の家に後を継ぐ者がいないというわけにはいくまいと、世の習いに従つて妾を持ったのが始まりだった。その女は来俊臣の心のつぼをみごとに押さえ、

「旦那様ほど心のお優しい方はおられません」。

と、日々に言う。

妻は相変わらずおどおどして、全くもって気に入らない。それでも妾ばかりを可愛がつて妻を邪慳にしたのでは己の沽券に関わると、妻には不自由させないだけの物を与えておく。

——非道なあの父親と俺は違う。

自分が情に厚い男であるさらなる証として、死罪や流罪になった連中のところ  
にいて行き場を失った女を屋敷に引き取ることもする。罪人は後から後から湧い  
てくるから、全ての女を引き取るわけにはいかない。父に棄てられた母を想って、  
特に美しい女を選ぶ。来俊臣の心を知らずに、主人を破滅させた羅織の徒のもと  
にくるのを拒んで死を甘受する女もいる。来俊臣の腕におさまった女にはできる  
限りのことをしてやり、

「お屋敷に参りましてまことに幸せでございます」。

と、必ず言わせる。

——本当の俺を知っているのはこの者たちだ。

屋敷で暮らす大勢の女に十分な幸せを与えようとすれば、それ相応の金品が必

要だ。五品官の俸給では不足する。賄賂に手を染めたのでは羅織の本分にもとる。目を付けたのが罪人の財産だ。刑が確定した罪人の財産は国家が没収する定めであるが、罪人が掴まると途端に四散してしまふのが常だ。もとより不正義によって集めた財産であるのだから、哀れな女を生かすために使って悪い理由はない。さすがに天下の官人が大っぴらにできることではないので、衛逐忠に働いてもらう。

**ある**罪人が来俊臣の取り調べを拒絶し、徐有功の尋問を受けたいと言う。

「勝手は許されない。法の定めだ」。

このごろの推事院では何かと故障の入ることが多い。来俊臣は苛立って罪人に酷く当たる。

「お上にあれを言っても構わないのか」。

罪人は蔑むような目を来俊臣に向ける。

「何だ、あれとは」。

「周興や索元礼の最後をよく考えるのだな」。

罪人は不敵な笑みを浮かべる。

——こいつ、何を思っているのだ。

不意に来俊臣の背に冷たいものが流れ、思わず居並ぶ獄吏の顔を見る。偶然か

どうか、衛逐忠の姿がない。

——気を許しすぎたか。

俄かに狼狽し、

「枷を持ってこい。求即死がいい」。

このごろは出番のなかった責め具を罪人に見せる。

「俺が何を知っているかわかっていたら、それを使う気にはならないだろうな」。

いよいよ意気軒昂であるので、

「四の五の言わさぬ」。

来俊臣は剣を取り上げ、その場にいた獄吏の中で最も気に入らぬ男に渡し、

「やれ。いいからやってしまえ」。

獄吏は剣を振りかぶる。

罪人は顔色を変え、来俊臣の秘められた悪事を叫ぶ。

「早くしろ」。

来俊臣の声に応じて罪人の首が落ちる。

来俊臣は汗を拭う。

正しい羅織の臣はこのようなことを決してしてはならないと王弘義を戒めていた。

——俺はどうしてしまったのだ。

自分の行為を理解できぬまま、とにかく常套手段で処理するより他はなく、刑は斬首に相当すると武皇帝に奏上する。

幸いにも斬首で確定し、事なくすむ。

衛逐忠に対していまままで以上に厚く酬いる。断ち切ることはすでに不可能な関係だ。

来子珣は鋭敏で、職務に身が入らず、日に日に痩せて行く。

「おまえの気の弱さは昔からだ、どうにかならぬのか」。

「兄貴、本当にすまない」。

弟分は涙顔だ。

「おまえのためだ、何とかしてやる」。

武官の口を見つけ、来子珣を押し込む。

ほっとした顔で、推事院を出て行く来子珣を見送りつつ、

——俺はここから動けない。

**天授二**（六九二）年九月、傳遊芸が反逆罪で獄に繋がれる。

傳遊芸は、皇太子になった夢を見た和家人に語り、それを聞いた者が褒美を目当てに告密したのだ。

「兄貴、どうかして助けられないでしょうか」。

来子珣が相談にくる。



「義理堅いおまえのことだ、気持ちわかる。しかし、私情をからめぬのが侍御史の鉄則だ。武官になって、そんなことも忘れたのか」。

来俊臣は弟分を叱りつける。その剣幕に来子珣は驚いて引き下がる。

来俊臣の心は穏やかでない。

——夢だけで身の破滅となるのか。だったら俺も。

夢で呼ばれたことは来子珣にも言っていない。推事院が置かれている現状を思えば、いくら用心しても足りないくらいだろう。誰に足を引っ張られるかわからない。

傳遊芸は獄中で自殺する。

来俊臣は身につまされ、夢のことをうっかり口走ったりしないよう、武皇帝を母と慕う思いを、消し去ろうとする。

ひたひたと迫りくるものに、来俊臣は居てもたまらず、傳遊芸の一件を逆手に取って推事院を守ろうとする。

傳遊芸でさえも不埒な考えを持つていたと罰せられた。武皇帝が頼みとする大臣までもがおかしな考えを抱いていると推事院が曝露したならば、武皇帝は真に頼れるのは推事院しかないと考えるようになるに違いない。

母と慕うのでなければ、武皇帝と来俊臣を繋ぐ特別なものはない。

——そもそも俺はなぜ推事院を任されたのか。俺が有能だからだ。それ以外に何があるのか。俺が真に有能で、国家にとって推事院が必要不可欠であることを、改めてお上にお知らせしなければいけない。

標的とする大臣として楽恩晦がくおんかいを選ぶ。楽恩晦は右衛門將軍の李安静りあんせいと親交がある。

李安静は武皇帝の即位に反対した数少ない者の一人で、武皇帝は嫌っている。ま

ず李安静を反逆の罪で推事院の獄に入れる。

李安静は尋問そのものを拒絶する。

「私は唐家の老臣。謀反の有無を問われれば、答えようがない」。

反意を認めたものと見なして、李安静と楽恩晦が親しくしている数々の証拠から、楽恩晦が反逆に加担していると告発する。楽恩晦は自供する。十分な証拠が揃い、二人は死罪になる。

間髪入れずに、来俊臣は、制度の改善を武皇帝に願い出る。容赦のない拷問を施して死罪の件数をひたすら増やす索元礼以来のやり方はもはや通用しない。推事院は率先してそれを改めるとして、最初の取り調べで自白した者には、それがいかに重い罪に当たるとも死を免じるようにしたいと申し出る。

武皇帝は来俊臣の慈心を賞賛し、法規を改める。

**束**の間的小康状態があっただけで、状況は深刻化する。

長寿元（六九二）年春、王弘義が激怒する。

「ひどい裏切りだ」。

「もともとそのような野郎だったのだ」。

侯思止は吐き捨てる。

「あいつはあいつなりに必死に考えたのだろう。それで糞を舐めた。そこまでやっってしまうのが、あいつらしいといえはそうなのかもしれない」。

来俊臣はわざと余裕を見せて笑う。

王弘義は怒りを強め、

「俺たちを裏切って、それですむと思うな」。

侯思止も、

「裏切りの代償は大きいのを思い知らせてやる」。

来俊臣は言う。

「まあ、俺に任せろ。私情でもって動いてはならない。推事院はあくまでも正しのだということ、あいつにも、魏元忠ぎげんちゆうにも思い知らせてやるのだ」。

推事院で口が最も巧みな郭弘霸が、魏元忠に擦り寄ろうとしてその糞を舐めた。

魏元忠は先ごろ御史中丞に任命され、推事院を含む洛陽の獄を根底から改める策を武皇帝に呈上した。

魏元忠と御史台には因縁がある。かつて索元礼と周興はある反逆事件を調べて、芋蔓式に罪人を増やし、魏元忠に及んだ。魏元忠は頑として否認したものの死刑を宣告され、同罪の数名とともに刑場に曳かれた。刑が執行される寸前に馬が飛

び込み、「刑を止めよ。皇太后様がたつたいま罪をお赦しになる詔に印を押された」と、魏元忠の友人が叫んだ。魏元忠は死を免じられて流罪になり、索元礼と周興が破滅した後に、武皇帝によって洛陽に呼び戻された。

郭弘霸は推事院は終わりだと考え、魏元忠が腹を病んだと聞いて、この好機を逃すまいと、のこのこ見舞いに行った。魏元忠は来訪を訝しく思い、一応の挨拶を受けてすぐに帰そうとした。郭弘霸は、「御病気は間もなく全快となりましょう」と喜びを述べた。魏元忠は警戒を隠さず、「案に相違し、一向によくありません。これでは仕事に差し支えかねません」。郭弘霸は満面の笑みを浮かべ、「何の御心配が要りましょうか。病が重く治らぬ者の大便は甘いと申します。私めが検分しましたところ、苦い味がいたしました。心配するに及びません」。

来俊臣は、

「糞を舐めてまで媚び諂う野郎に関わっては、こつちまでちっぽけな奴と見られてしまう。俺たちの底力を見せ付けて、天下をあつと言わせた方がいい。俺にいい考えがある」。

じつとしていては魏元忠に負ける。大きな勝負に出るしかない。それは推事院の手に余るほど巨大で、来俊臣は武皇帝の甥の武承嗣ぶしょうしの力を借りる。

武皇帝は武士護ぶしかくと楊氏ようしの間に生まれた娘であるが、武士護には相里氏そうりとの間に武元慶ぶげんけいと武元爽ぶげんそうという二人の息子がいた。武元慶には武三思ぶさんし、武元爽には武承嗣ぶげんけいという子があり、二人とも皇帝の甥として高い地位に就いている。

武皇帝の政権を支えているのは、大きく分けると、血縁者の武一族と、武皇帝自身が吟味して抜擢した新興官僚だ。魏元忠は後者の典型で、無位無官から、武太后によって一気に朝廷の要職に引つ張り上げられた。来俊臣も似ている。新興

官僚と武一族は微妙な緊張関係にある。

来俊臣は武承嗣と手を組み、朝廷の最上層に名を連ねる新興官僚をこっそり推事院の獄に叩き込む。標的の第一はもちろん魏元忠で、それよりも大物であるところの狄仁傑てきじんけつを加え、李嗣真など十人ばかりを連座させる。侯思止が魏元忠を、来俊臣が狄仁傑を担当し、残りを王弘義に任せる。王弘義が調べた相手は新規定によつて死を免れようとすらすると自供する。

魏元忠はかつて死刑を宣告された事件でも最後まで罪を認めなかった難物である。今回も侯思止を手こずらせる。魏元忠を裸にして縄で縛つて馬に繋ぎ、尖つた砂利を敷き詰めた上で滅多やたらに曳き回す。魏元忠は全身血まみれになり、「侯思止よ、わしの頭が欲しいのなら、さつさと切つて取れ。わざわざ白状させる手間を省くがいい」。



いかなる責め具を用いても口を割らせるのは不可能とみて、獄に置いて弱らせることにする。

来俊臣は狄仁傑と向き合つて、かつて味わつたことのない異様な感覚に吐き気さえも覚える。

——こいつを生かしておいたなら、俺は死ぬしかない。

来俊臣と狄仁傑は全く異なる人間である。

十六年前、武皇帝がまだ皇后であつたころ、先帝の墓である昭陵に生える柏を誤つて切つた者がいた。高宗皇帝は父の墓所が荒らされたのを怒つて死刑にせよと命じた。狄仁傑は皇帝を諫めた。

「柏を切つた罪は死に相当しません。法の定める処分は除名です」。

皇帝は激怒した。

「死刑にしなければ朕は不孝を為すことになる。そなたはそれを望むのか」。

狄仁傑は言った。

「法は死に至らぬと定め、陛下は殺せとお命じになられます。これでは人は法を信じぬようになります。人はいかなるところに手足を置けはよいのでしょうか」。

皇帝は死刑ではなく流罪とした。

その後、李沖の反乱に呼応して、予州にいた李貞が挙兵して失敗するという事件があった。李貞と関わりのある七百戸五千人が予州の獄に繋がれ、死刑を言い渡された。その直後に予州刺史が交替となり、新たに狄仁傑がきた。狄仁傑はすぐに獄に赴いて罪人の械かせを解き、減刑を武太后に願い出た。武太后はそれを許し、囚人は流罪となった。罪人は刑地に向かう途中で、その二年前まで狄仁傑が刺史をしていた寧州を通過した。寧州には狄仁傑の善政を追慕して土地の者が建

てた徳政碑があつた。罪人は徳政碑の前で寧州の人々とともに泣いた。

来俊臣は、激しい憎悪から狄仁傑を正視できない。

——これでは俺が負けてしまう。

狄仁傑を卑劣な人間に引きずり落とそうとする。

おうとくじゅ

下吏の王徳寿に狄仁傑の世話をさせる。王徳寿は温厚な老人で、その親切に狄仁傑は次第に心を許すようになる。王徳寿は折を見て、誰かを告密すれば、必ず獄から出られるようになると誘う。

「この狄仁傑、かようなことは決してしない。その証はこれだ」。

柱に頭を激しく打ち付ける。鮮血が王徳寿の胸元に飛ぶ。

来俊臣は目論見が不首尾に終わったことで憎しみを募らせ、自制心を失つて十種の枷を用いる。苛烈を極める詮議に狄仁傑は屈する。

魏元忠だけは認めない。それでも、他の者の供述から事件の全容が解明されたとして、武皇帝に裁可を仰ぐ。

季節は夏に入っていて、狄仁傑は合わせの着物を脱いで王徳寿に渡し、

「すまぬが、これでは暑くてかなわぬ。家に届け、綿を抜いてから、また持ってきてくれまいか」。

「たやすいことでございます」。

王徳寿は請け負う。

来俊臣は武皇帝に呼ばれる。勝利を確信する来俊臣は、御裁可が直接に言い渡されるであろうと勇んで参内する。

「狄仁傑は謀反を認めたとそなたは言うが、冤罪であると訴える者がいる。どうしたことだ」。

かつてない厳しい声に、来俊臣はうろたえる。

「狄仁傑本人が罪を認めましてございます。間違いございません」。

「狄仁傑を痛めつけ、無理やり自白させたのではあるまいな」。

「索元礼や周興ならばそのようなこともしたでありましょうが、今日の推事院におきましては一切ございません。狄仁傑は自ら進んで自らしたことを申し述べたのでございます」。

来俊臣は事実でないことを言う。

「そうであるか。そなたを疑いたくはないが、念のために一、二聞いておきたい」。

武皇帝は獄中の様子を尋ねる。来俊臣は答える。武皇帝の問いは細部にわたり、来俊臣は答えるたびに嘘を並べることになる。

——これはいけない。

来俊臣の背に冷たい汗が流れる。

しかし、嘘を重ねる以外にない。最後の問いに答え終わると、武皇帝の深い嘆息が御簾を通して聞こえてくる。来俊臣は凍りつく。

武皇帝は言う。

「朕の手元に一枚の布がある。狄仁傑の子の光遠こうえんが持ってきた。血に染まっている。狄仁傑が獄中ふしちゆうで衾を裂き、無実の訴えを記した。そなたの目で見るがよい」。

御簾の内より布が差し出される。来俊臣は、手の震え、声の震えを懸命に抑え、「これは狄仁傑の衾ではごございません。推事院の獄ははなはだ清らかでありまして、衾に血がつくとは考えられません」。

「そうであるか。ならば、これより獄を検分させる」。

武皇帝は周緄しゅうりんを呼び、来俊臣とともに直ちに推事院に行けと命じる。

来俊臣は一瞬の間を見て、下吏を推事院に走らせる。

周隼が推事院に到着すると、狄仁傑は清浄な獄で真新しい衾の上に座している。

周隼は来俊臣に目を向ける。来俊臣は周隼が求めているものを読み取る。

周隼は狄仁傑に言う。

「お上の御命令で獄を検分に参った。衣類を脱ぎ、背を向けて立つのだ」。

狄仁傑は言われた通りにする。その背には拷問による傷痕があるのだが、獄のなかに入って検分する周隼はそれには一切目を向けない。

「よろしい」。

すぐに出てくる。

周隼は来俊臣の意に沿った報告を武皇帝にし、来俊臣は周隼に黄金を送る。

それだけでは安心できず、来俊臣はさらなる嘘をもって嘘を塗り固める。狄仁

傑の筆跡を真似て、朱南山が謝罪文を書く。罪を認め、お上の憐憫を乞う内容である。

来俊臣は再び武皇帝に呼ばれる。

武皇帝は、意外にも先の楽恩晦の事件について問う。

「どのような取り調べをした。隠さずありのままに申してみよ。」

前にも増して厳しい声に、

「臣は常に正しく調べております」。

小さく答えて思わず落涙に及ぶ。

——なぜこのようなことになってしまったのか。

その訳は来俊臣自身が最もよく知っている。

武皇帝の声は急に優しげになり、



「楽恩晦には十歳にならぬ子がいて、その子が、父の無罪を朕に訴えにきた。小児の思いの切実さに朕の胸は塞がった。子は朕に尋ねた。父は良き臣であつたかと。事件が起こるまではそう思っていたと答えた。子は言った。父に限らず、良き臣がひとたび獄に繋がれると、異口同音に謀反を企てていたと申すのは何故なのでありましょうか、よくお考えくださいと。朕はその言葉をまことに訝しく思った。小児はその純真な心で、物事の理非を最もよく知っているのではなからうか」。

来俊臣は身を投げ出す。

——全てが崩れ去った。

それでも懸命に踏みとどまろうとする。

「どうか臣のこの首をこの場でお切りください。陛下がお下しになられた処罰を

疑う者が出ましたこと、臣の落ち度にございます」。

来俊臣は号泣する。

来俊臣は賭けに出た。その卑劣さに痛みを覚え、しかし、助かりたいとの思いは強い。

武皇帝は悄然とつぶやく。

「人が百を行えば、一ないし二の遺漏もなしとは限らぬであろう。大いに心せねばならない。朕はそなたをよく知っている。よいか、よく心せよ」。

来俊臣は地に額を打ち付けて謝罪する。

過去に数多の冤罪があつたとしても、その全ては、武太后ないし武皇帝の名をもつて刑罰が執行された。武皇帝が自らそれを覆すことはありえない。そのような知恵を他ならぬ武皇帝の目の前で働かせたことを、来俊臣は無性に腹立たしく

悲しく思う。しかし、そうするより他になかった。

武皇帝は、狄仁傑や魏元忠を地方官として都の外に出す軽い処分とする。武承嗣はなおも死刑にすべきだと主張するが、武皇帝は聞き入れない。

**推**事院の終焉は近いと来俊臣は感じる。

裏切り者の郭弘霸は推事院を出て別の職を得る。王弘義と侯思止は意気阻喪し、推事院は静まり返る。来子珣は推事院に寄りつかない。

来俊臣は嘘を重ねたのを悔やみ、武皇帝に知られるのを恐れる。

——お上は全てをお見通しだ。

以前ならそのように思うことで、母と慕う武皇帝の特別の恩顧が我が身に注がれていると確信できたのだが、いまでは逆にただただ恐れおののくのである。武

皇帝の目から遠く逃れたく思い、しかし、羅織の臣は武皇帝のもとでしか生きられないのは明白な事実なのである。

来俊臣が心の落ち着きを得られるのは、

「お屋敷に参りまして幸せにございます」。

と言ってくれる女たちに囲まれているときだ。

——俺の本当の姿はここにある。

衛遂忠の佞弁もまた慰めとなる。衛遂忠は、誰その妾はすこぶる美女であるとか、どこそこの屋敷には美形の妓女がいるとか、しかし女は虐げられていて可哀想であるとか、いろいろな話を持つてくる。より多くの女を救い出して、自分の本当の姿を見せたいと、来俊臣は躍起になる。金が湯水のごとくに出て行く。

罪人から財産を奪う機会は以前のようにではなく、困って来子珣に無心にする。

「兄貴のためならいつでも喜んで」。

来子珣は来俊臣の望む通りに用立てるのだが、その実、ここのところ平常心を失っていて、突飛な行動が多く、人々に奇異の目で見られている。すこぶる珍奇な衣服を身に着けて役所に現れてみたり、方士を真似て火に潜って身を焼いてみたりするのである。

来俊臣は際限なく弟分に無心し、来子珣も応じ切れなくなつて、左衛大將軍の泉せん献誠けんせいが非常に裕福であるからと仲立ちをする。泉献誠は、来俊臣が抱えるある美女をよこすならその代わりに貸そうと言う。来俊臣は背に腹は代えられないと、名指しされた美女を連れて泉献誠の屋敷に行く。会うと泉献誠はまことにむくつけき男で、美女は、

「旦那様とお別れしたくありません」。

と、すがって泣く。来俊臣も、こんな奴に指一本触れさせたくないと思い、泉献誠に別の条件を持ち出す。いろいろ話をして、もうどうにも不首尾に終わり、我慢ならず、

「獄に入れるぞ」。

と、脅す。

「困るのはどちらかな」。

泉献誠は蔑むように笑う。

来俊臣は泉献誠を反逆罪で獄に叩き込む。証拠となるものなど何もない。泉献誠は頑として認めない。

泉献誠の親類が手を回しているらしいと聞こえてきて、来俊臣は焦って拷問に走り、あげくに縊り殺してしまう。もはや通用しない古い手を使い、斬罪にすべ

しとの上奏文を武皇帝に提出する。

同じときに、武皇帝は、監察御史の嚴善思げんぜんしに対し、罪を自供してまだ刑が確定していない囚人を全て吟味し直すよう命じる。

来俊臣の胆が縮む。泉献誠の件が再吟味の対象になれば、泉献誠を蘇らさなければならぬ。

幸いにも、再吟味とはならず、武皇帝の裁可で泉献誠の死罪は確定する。

一方、嚴善思によって八百五十余人が冤罪であったとして釈放される。

**衛**遂忠が耳寄りの話を持ってくる。

太原たいげんの名門の王慶詵おうけいせん様にしこぶる美人の娘がおりまして、段簡殿だんかんのところに入りすると決まったのでございますが、本当のところは、王慶詵様は段簡殿がお

嫌いで、娘をやりたくないのです。しかし、お断りすると後が怖いものですから、仕方なく承諾したのでございます。お気の毒ではございませんか。実は、あつしは、段簡殿の弱みを、ここにしっかりと握っているのです。」

衛遂忠は拳を突き出す。

聞くと、なかなか使えそうな話である。

この時代、出世する第一の条件は家柄である。狄仁傑や魏元忠のように学問を修めて高位に昇った者もいることはいるが少数派であり、周興のように下吏から、あるいは来俊臣のように博徒から官人になった者となると例外中の例外にすぎない。武皇帝は有為の人材を抜擢するのにすこぶる熱心であるが、家柄も重視し、まだ皇太后であったところに、一時代前の貴族の家柄の序列に自身の武一族を加えた新たな序列を定めている。



太原の王氏といえば名門中の名門だ。だからこそ段簡は是が非でも王氏の婿になろうとしている。来俊臣は、もしもに自分が婿おさまるならば、たとえ推事院が廃止されても生き延びられるのではないかと考える。

「兄貴、それはいくら何でも」。

来子珣は渋る。王氏の婿になるにはまず妻を離縁しないといけない。

「とにかく長安へ連れて帰ってくれ」。

妻を来子珣に押し付ける。妻はほっとした様子で屋敷を離れる。

段簡は他でもない来俊臣の追隨者である。『告密羅織経』を学んで地方で実践し、芳しくない名を流している。それで王慶誥は段簡を恐れている。

衛遂忠が段簡を脅すと、後ろに本家の来俊臣が控えていると知った段簡は震え上がり、王慶誥の娘との婚約を自分から辞退する。

来俊臣は王慶誂に求婚する。王慶誂は拒む。次の手は用意してある。朱南山が書簡を偽造する。武皇帝自身がこの結婚を望んでいるとの話に、王慶誂は承諾するほかはない。

来俊臣は名門の婿となり、それにふさわしい上品な振る舞いを習う。新妻はもちろん羅織の仕事を嫌っている。来俊臣は、推事院の者に屋敷への出入り禁止、新妻の前では羅織の仕事について一切話さない。

妻の親類を招いて宴を催す。親族は、間近に見る来俊臣が思いがけず眉目麗秀で優美であることに一驚する。まずまずの首尾であると、来俊臣は気をよくする。なぜかそこに衛遂忠が闖入してくる。

「ここはおまえのくるところではないぞ」。

来俊臣は小声で叱って追い返そうとする。

「あつしはいわば仲人なのでございますが」。

衛遂忠は満面の笑みである。

「しかし、あれが好まぬのだ。頼むからここは出ていってくれ」。

衛遂忠は耳に入れず、大袈裟な身振りで、宴に並ぶ人々に祝いの言葉を並べる。

得意の佞弁である。訝しく衛遂忠を見ていた人々も、思わず知らずいい気分にさせられて陽気に笑う。

それでも、そのうち馬脚を現しはしないかと来俊臣は氣を揉み、酒を与えて退散させようとする。衛遂忠は酒が入るといよいよ勢いづいて腰を落ち着けてしま

う。

——こいつは何をしにきたのだ。

来俊臣が懸念する通りになる。衛遂忠は悪乗りして、下品なことを時々口走る。

延々と続く衛彦忠の独り舞台にさすがに座は白け気味となり、客人は顔を見合わせ、来俊臣は赤面する。

「もうこのくらいにしてはどうか」。

衛彦忠の手を引いて行かせようとすると、衛彦忠は来俊臣を押しつけ、

「そう言えば、俺様がお世話してさしあげた嫁殿はどちらにおられるのでござい  
ますか。こちらでございませうか」。

やおら階を上って、奥に掛かる御簾をめくり上げる。新妻は悲鳴を上げて逃げる。

「出て行かないか」。

来俊臣は怒鳴る。

「俺様にそんな口を叩いてよいものですか」。

急に衛彦忠は毒づく。来俊臣が狼狽するのを尻目に、客人は一人二人と立ち去る。呼び止めようと来俊臣が駆け回る間に、衛彦忠は姿を消す。

その夜、王慶説の娘は自害する。

翌朝、呆然としている来俊臣の前に、衛彦忠が自ら全身を縄で縛って現れ、地に伏して謝る。

——こいつは何をしにきたのだ。

必ず許すまいと思っただけ、衛彦忠は詫びつつ、得意の佞弁をきかせ、その上、手に握っているものをちらつかせる。

「きちんと始末を付けてくれるのなら、考えなくてもない」。

探るように言うと、衛彦忠は大袈裟に地面に平たくなり、

「有難き幸せにございます。あつしがしでかしたことでございますから、全てあ

つしがいたします。旦那様は何の心配のいらないのでございます。あつしの腕前はよく御存知でございますよう」。

衛遂忠はぐいと顔を上げる。満面の笑みに、来俊臣はぞつとする。

衛遂忠の手腕で、王慶誂との間に難しいことは何もなくてすみ、新妻は病死と  
いうことで葬られる。

しばらくすると、衛遂忠は、段簡の家から美人の妾を連れてくる。

「何だ。これは」。

「せめてもの罪滅ぼしです。これでお気がすまないのなら、まだ他にもいます」。

「いくら金を使った」。

「これはあつしの気持ちでございます」。

衛遂忠に借りを作りたくないと思っても、衛遂忠の気を損ねることは決してで

きない。その女を受け取る。

「旦那様のお屋敷にこられてまことに幸せにございます」。

その女はすぐにそのように言う。

このようなことをしている間に、来子珣が流罪になる。来俊臣の元の妻を長安に連れて戻ってきた直後に収賄の容疑で獄に曳かれたのだが、そのことを来俊臣が知ったのは、すでに来子珣が刑地に連れられた後だった。

来俊臣は愕然とする。

——俺は何をしていたのだ。

しばらくすると、来子珣は刑地に着いてすぐに死んだと聞こえてくる。

——俺を本当に慕ってくれたのはあいつだけだった。それなのに。

来俊臣は氣力を失う。

推事院は閉鎖を待つばかりだ。

せめて王弘義、侯思止の身の振り方くらいは考えてやらねばと思っても、何の知恵も浮かばない。二人だけではない、推事院が廃止されれば、全土に巡らした壮大な網に従事する多数の者があぶれることになる。元の無頼漢は再び世の裏側へと退場するしかない。限りなく悔しいが、いまの来俊臣にはどうすることもできない。

**長寿**二（六九三）年春、来俊臣は武皇帝に呼ばれる。

ついにその日がきたと覚悟を決めて参内すると、

「これは国の将来をまさしく左右する重大案件である。よく心せよ」。

意外にも新たな仕事を与えられる。



重大案件の被疑者は李旦だ。武皇帝の実の息子で、いまは皇嗣の位にある。

「これはそなたでなければ任せられない」。

武皇帝の言葉に、我を忘れ、地に伏して慟哭する。

「どうした」。

来俊臣は溢れる涙を拭いもせず、

「我が推事院にまたお役目を頂戴し、その有難さに」。

言葉を詰まらせる。

「案じるでない。推事院はそなたのために作ったのだ」。

来俊臣は息を吹き返し、羅織の本分がいかなるものであるかを天下に見せつけてやろうと心に誓う。

皇嗣が文字通りの意味であるのならば、李旦は皇帝を嗣ぐ存在である。しかし

皇太子ではない。武皇帝の後継者として確定はしていないということだ。武皇帝が樹立した周は武姓の国である。ならば武姓の者が後継者になるべきだとの考え方があつた。武承嗣のような甥が有力視されている。

李旦は武皇帝の息子であつても李一族の人間だ。武皇帝の死後に李旦が皇帝になれば、李一族が息を吹き返すのは間違いない。そのときに、武一族が安泰でいられる保証はない。

来俊臣は自分が呼ばれた意味を考える。

——武一族の誰かを後継ぎとされるお心であるに違いない。

来俊臣は武承嗣と近い。

来俊臣は以前に范雲仙はんうんせんという者を、李旦と秘かに会つて反逆を企んだ罪で死刑にしている。李旦はそれ以来、人と会うのを厳しく制限されるようになったのだ

が、近頃、その禁を破った者がいるとの告密があつたのである。

来俊臣は王弘義、侯思止とともに、李旦の身边の用を勤める者を一齐に獄に繋ぎ、李旦の日常の行動を徹底的に調べる。禁を破った者の名が次々に挙がる。李旦が謀反を企んでいる証拠がほぼ揃う。ただ安金蔵あんきんぞうだけが、李旦は一度たりとも禁を破っていないと言い続ける。そればかりでなく、安金蔵は他の者が自供した内容に矛盾点があると論駁する。安金蔵は記憶力に優れその指摘は鋭い。種々の責め具を用いても安金蔵は屈しない。

「何を言っても貴様たちは信じない。ならば、偽りなきこの赤心を見るがいい」。

安金蔵は刀を得ると、腹から胸へと切り上げ、五臓を掻き出す。

その行為を聞いた武皇帝は、すぐに安金蔵の体を宮中に運ばせる。御殿医が総出で五臓を体に納め、桑の皮の筋で傷を縫合し、薬を投じる。一晚経って安金蔵

は蘇生する。その枕辺を武皇帝が見舞う。

「我が息子は自分で身の潔白を証明できず、汝をこのような目に遭わせた」。

来俊臣は取調べを中止するよう命じられる。先に自白した者は全て釈放となる。

来俊臣は安金蔵に敗れた。

**推事院**の終焉は間近だ。

武皇帝は不正を嫌う。だから推事院を設け、『告密羅織経』を賞賛した。推事院は真実を明らかにする場所でなければならなかったのだが、来俊臣は武皇帝の望むような推事院を作ることには失敗した。

侯思止は官物の錦を横領した罪で捕えられ、朝堂で杖殺される。来俊臣は侯思止を救えない。

延載元（六九四）年秋、王弘義と来俊臣に告密が及ぶ。王弘義は、一度目の取り調べで自供すれば死を免れるとの規定にすがってすらすらと自供し、南方に流罪となる。刑地に着くと、他の罪状が改めて付け加えられて杖殺される。

来俊臣は五つの罪を問われる。尋問は詳細を窮める。そこまで知るのには明らかに衛遂忠しかいない。罪を認める以外にない。法の定めによって王弘義と同様に死を免じられることになるのだが、羅織の巨魁は斬罪にすべきだと、多くの人々が主張する。

——俺は万死に値する。

獄中の来俊臣は覚悟を決めている。

——母に呼ばれたと思つて洛陽にきた。それなのに、身の守ろうと、母と慕う心を消し去ろうとし、平然と嘘を重ねた。これほどの過ちをして生きていいは

ずがない。

武皇帝は驚くべき決断を下す。処分は地方官への転出。任地は長安にごく近い同州である。

獄より釈放された来俊臣は宮城に向いて地に伏して泣く。

——この俺になお生きていよとおっしゃってください。それはもしかすると、母と慕う心がきつとまだあると見てくださっているからなのか。

胸の奥底を自ら省みて、来俊臣は強く思う。

——俺は変わらなければいけない。最初の気持ち、それを大切にしよう。我が身を徹底して改め、お上に捧げるのだ。洛陽にきた最初の志を果たそう。これから地方官として誠心誠意、真面目に働こう。その結果、もしも再び洛陽に呼ばれるような幸いを得たならば、今度こそは必ず正真正銘の忠義の士になる。

**来**俊臣の決意は立派であっても、切迫した難題がある。どのようにして同州に生きて辿り着くかだ。周興は流される途中で恨みを持つ者によって殺された。来俊臣の憎まれ方は周興の比ではない。

来俊臣は弟分を失い、仲間を失い、信用できるのは「幸せです」と言ってくれ  
る女たちだけだ。身边を大勢の女で固め、輿に乗って、外界と完全に遮断した状  
態で移動する。それでも人々の憎悪の眼差しが容赦なく突き刺さってくるのを感  
じずにはいられない。

同州に着けば着いたで、王弘義と同じように、新たな告密によって殺されてしま  
うのではないかとの恐れがつきまとう。忠義の士に生まれ変わろうとの心があ  
っても、その機会を与えられずに殺されてしまうのは不条理である。

来俊臣は同州で小さな住まいと小さな執務室を与えられる。その間の往復には常に身の安全に気を配らなければならない。役所ではこれといった仕事はない。誰一人として顔を見せる者もなく、ただひたすら無聊をかこつばかりで、地方官として真面目に働く姿を見せることができない。

——世間の連中は俺のことをわかってほしい。

心の拠り所は女たちだが、小さな住まいでは大勢の女の居場所もないので、携えてきた財を費やして広いところに移る。地方の閑職に追いやられた身で、その暮らしを維持するのは所詮不可能で、試しに女たちに聞いて見る。

「そなたたち、この家から出て行きたいか」。

女たちは一斉に答える。

「このお屋敷に参りましてこれほどの幸せはございません」。



——この者たちは真実を言っている。

女たちとの暮らしを守るために、来俊臣は、渦巻く憎悪を逆手に取る。

——どうせ世間は俺を嫌っているのだ。

来俊臣は痩せても枯れても羅織の親玉である、ひと睨みすれば人はなお怖れる。ある商人は財産を、ある吏人は娶ることになっていた娘を来俊臣に献上する。

このようなことをしては、それこそ生口密の種を蒔いているようなものだ、時に冷静に考えもするのだが、女たちのためにやめるわけにはいかない。

——本当の俺はこうではない。だか、世間がさせてくれないのだ。

**ある夜**、夢で久しぶりに母の声を聞く。

「これで終わってしまうそなたであってはなりません」。

溢れる涙で目覚める。

——そうだ、この俺は違うのだ。俺は獄を出て変わったのだ。だが、ここにいてはどうすることもできない。やはり母だ。お上の前にこの身を置くならば、必ずわかってくださる。そのときこそ本当にやり直すことができる。

来俊臣は、何としてでも洛陽に帰りたいと思うようになる。

どうしたら帰れるのか。武皇帝に会えたそもそも最初の最初は告密だ。羅織の臣の本分は告密にある。

求めるときには自ずとそれはくるのであろうか、長安で網を張る仕事をしていた男がふらりと同州に現れ、吉頃きしよとくという官人が羅織の教えを受けたがっていると  
言う。

「それはどのような男なのか」。

「あけすけに言ってしまったえば、人を抜かして出世することだけを考えている男です。見かけはなかなかの優男やさむしで、耳に嬉しい親切めかした声でうまいこと言っていて、平然と人を酷い目に遭わせます。あつしはあの方のそのあたりのことをちやんと心得ていて、こうした使い走りを買って出ているのです。何しろ、推事院があのようになってしまつて、あつしも生きるに必死なもので」。

「皆に苦勞をかけてしまつてすまないと思つている。もしもこの話がものになるものなら、推事院が蘇ることだつてあるいはあるかもしれない。うまくやつてくれ」。

来俊臣は羅織の臣の底力を見せてやろうと考える。

告密で最も効果が大きいのには、『告密羅織経』にもある通り、複数箇所からの同時告発であると、吉垣に伝える。吉垣は来俊臣と密に連絡を取り合つて、はなは

だ規模の大きい告密を行う。長安から吉頊が、洛陽で武懿宗がいそうが、同州から来俊臣が同時に告発する。武懿宗は境遇に不服のある武一族の者だ。吉頊と武懿宗は、名士三十六家を謀反の罪で連座させて死刑にし、千余人を遠くに流す。

神功元（六九七）年春、来俊臣は洛陽に呼び戻される。

宮中の御殿の階の下で、武皇帝のお出ましを待つ。この場の土に感触に、武太后の目に触れた最初の日のことを思い起こす。

——初めに戻って俺はやり直す。

早くも溢れ出る涙で袖は濡れている。

——このときのために生きていたと言ってもよい。先のことなどもうどうでもよい。俺がここにいるのを見てもらえたらそれだけでいい。

武皇帝が静かに現れる。

「よくぞ戻ってきた。朕は惑わされた。そなたがいなければ世は治まらぬ。あのまま終わってしまうそなたではないと思っていた」。

夢と同じ声だ。

「身に余るそのようなお言葉を賜りに、この場で死んでも悔いはありません」。  
実際にそうするのが最も幸福であったのだろう。

**武**皇帝は、来俊臣のために推事院の門を再び開く。足を踏み入れると、自分を売ったであろう男が地に伏している。

——こいつは何者なのだ。

衛遂忠は額を打ち付けて謝罪する。

目を背け、無言でその前を通り過ぎようとする。

——俺は真に忠義の士として生まれ変わった。過去の些事に拘泥しない。

衛彦忠はがばと跳ね起き、妙な叫び声を上げる。

思わず振り返ると、背の高い衛彦忠が両手を上げて突っ立っていて、また何事かを叫び、急に腰を低く折って縮み、よちよち歩きで、しかしすばやく来俊臣の周りを回りながら、推事院に復帰した祝いの言葉を連ね始める。来俊臣は腕を振って追い払おうとするが、衛彦忠があくまでもまとわりついて、前に進めない。

その間に、衛彦忠は佞弁の洪水で来俊臣を溺れさせようとする。耳に入れまいとしても何時の間にか聞いてしまっている。何を言えば喜ぶかを衛彦忠は十二分に知っている。

まんざらでもない気分になっているのに気付いて来俊臣はぞつとする。衛彦忠は何もかも知っている。敵にすることは絶対にできない。

「推事院はこれまでとは全く違うものになる。そなたにも変わってもらわなければならぬ」。

「もちろんでございますとも。御覧下さいまし、十種の枷も、その他の責め具も全て片づけ、獄は清浄そのものにいたしてございます。旦那様のお考えになることは、おっしゃる前に何でもわかるのでございます。それがこのあつしでございます」。

衛遂忠はすつと身を伸ばして胸をどんと叩き、満面の笑みで来俊臣を見下ろす。「せいぜい励んでくれ」。

**吉頃**とは洛陽にきて初めて会う。聞いていた通りの美形で、聞いていた以上の能弁だ。極めてへりくだった態度で、衛遂忠に負けなくらいに、来俊臣のこと

を持ち上げる。

ところが、吉頃は瞬く間に昇進して来俊臣よりも上の官位になると、掌を返したように態度を変える。宮中で顔を合せてもことさららしく来俊臣を無視し、逆に来俊臣が非礼であると言いふらす。吉頃は科擧の合格者で、出世の糸口さえ掴めば宰相に昇る可能性もあるいわゆる「清流」で、博徒上りの来俊臣とは根本からして違ふ。

衛遂忠が言う。

「あのお方はもとからあのような奴だったというだけでございますな。そのうちきつとつまずきましよう。たちまち舞い上がって、たちまち墜落する。そんな連中を、旦那様もたくさん御覧になりましたでしょう。何を言おうと抛っておけばよろしいのです。旦那様とは心根が違い過ぎます。いずれ何が起こるか見もので



「ごいいます」。

吉頃は推事院を批判する。来俊臣はもとより推事院を改める考えであったから、吉頃が何を言おうと聞き流す。それはそれでいいのだが、推事院を変えろということは、すなわち、獄では閑古鳥が鳴いて、網に携わる無頼漢たちに仕事を与えられないということになる。

吉頃は、御史台と別に推事院を設けておく存在意義がないとして、その廃止を武皇帝に提案する。

「これですからな。学問のある人は、情を知らぬということでありましょうか。人を踏み付けて何とも思わない」

衛遂忠は来俊臣を煽るようなことを言い、吉頃をつまづかせる非常にうまい材料をちらつかせる。その誘惑に勝てず、来俊臣は吉頃を告発する。

このとき吉頃の方が武皇帝との距離が遥かに近く、来俊臣の告発状が武皇帝のもとに達するよりも前に、

「私は間もなく無実の罪を被せられましょう。私が俄かに地位を得たために、妬む者がおるのです」。

吉頃は武皇帝に衷心を訴える。

来俊臣は武皇帝に呼ばれ、厳しく叱責される。

「そちを推事院に戻して最初の仕事がこれなのか。吉頃は大事な臣下である。次にもしも誤ったならば、そちといえども赦しはしない。よくよく心をせよ」。

来俊臣は失意に沈む。

——俺などは物の数でもないのか。

洛陽に呼び戻され、武皇帝からやはり特別な目で見られていると感じていたの

だが、所詮は博徒上がりで、科擧の合格者と同列になることはなく、あるいは生まれのよい者には到底適いはいはしないという現実を思い知らされる。

武皇帝は吉頊を重んじ、それ以上に張易之ちようえきし、張行成ちようこうせいという兄弟に特別な愛情

を注いでいる。張兄弟は家柄がよく、揃って美貌である。錦繡を纏い、顔に薄化粧をして朝廷に並ぶ。武皇帝は何かにつけて兄弟に意見を尋ね、よい答えをすれば絶賛し、それほどでもないときには噛んで含めるようにして教える。兄弟が耳を傾ける姿に「賢い子たちだこと」と相好を崩す。兄弟の覚えのあまりの目出度さに、兄弟のどちらかが皇帝の後継者に選ばれるのではないかとの噂すらある。武承嗣、武三思、武懿宗といった武氏の者たちでさえも兄弟の機嫌を取り結ぼうと、屋敷に日参して、宮中に向かう兄弟の馬の轡を争う始末である。

「これで世間を見返しておやりなさいまし」。

衛遂忠は来俊臣の心に巧みに入り込んでくる。

推事院は暇をかこつてばかりはいられない。謀反の罪である人物を告発し、思惑通りに死罪にする。

——やはり推事院はこうでなくてはならないのか。

死刑になった者の息子が、父は冤罪であると、朝堂に駆け込んで訴える。居並ぶ群臣は聞こえぬふりをする。息子は進退窮まってその場で腹を刳り抜いて死ぬ。

一人が咽び泣きを漏らす。

推事院への憎悪は深いところにある。

——断じて冤罪ではない。

来俊臣は怒りに駆られ、咽び泣いた者を謀反の一味として獄に繋ぐ。以前のような残虐すぎる拷問を使わず、思うような自白をしない。苛立つ来俊臣は処置を

誤り、うっかり縊り殺してしまう。斬罪にすべき罪状だったと裁可を仰ぐ常套手段に頼る。

来俊臣の屋敷には相変わらず多数の女がいて、心の拠り所になっている。

——世間はわかってくれないが、女たちは違ふ。

より多くの女に自分の真の姿を見せたいとの来俊臣の願望ははなはだ強く、衛遂忠がちよくちよく耳よりの話をもつてくる。

「蛮賊などはちよいと脅してやればひとひねりでございます。舞姫はひどい扱いをされていまして、旦那様がお救いしましたら、どれほど喜びますことか」。

にしとっけつ  
西突厥の酋長の屋敷に極上の舞姫がいて、酋長を脅かせば、舞姫ばかりか金も得られるという。女たちのために金が足りないのも相変わらずだ。

——不幸な女のためにするのだ。

衛遂忠に任せると、珍しく話をこじらせてしまう。行き掛かり上、荒業を使うしかなくなり、曾長ら数十人を謀反の疑いで告発する。曾長は捕縛の手を逃れ、宮中の門の前に並んで冤罪であると訴える。来俊臣の告発状は保留となる。

それ以外の案件も、推事院が手掛けることが留め置かれたままとなる。

「旦那様、こいつは妙です。何とかしないとやられてしまいますな」。

衛遂忠は険しい顔で言う。

悔しさが湧き上がってくる。

——せっかく洛陽に戻ったのに、吉瑣らに阻まれて推事院は新しい姿を得られずに取り潰されてしまう。俺の思いはどうして届かないのか。

長安を飛び出たときの気持ち甦る。

——俺はこれでは終わらない。世の中をひっくり返してやる。

死んだ弟分のためにもどうにかしたいと思う。

**来俊臣**は起死回生の大勝負に出る。

「兄貴、それはいつもの悪い癖です」。

来子珣の声が聞こえるようだ。勝ち目はない。しかし、いずれにしてもこのままでは終わりだ。ならばこれ以上はない大きな勝負を仕掛けるしかない。唯一の希望は武皇帝の心だ。

かつての同志、武承嗣を反逆罪で告発する。推事院に私情はない。真実を明かすのが推事院の使命だ。

武皇帝は即位から七年、すでに七十歳を超えている。遠からず必ずくるであろう万一のことがまだ決まっていない。皇位を継がせるのは息子か、武氏の誰かか、

それとも特別な寵愛を受けている者か。

来俊臣の目論見は巨大だ。まず武承嗣を捕え、次いで武皇帝の娘の太平公主も、その他の武一族も根こそぎ獄に放り込む。張兄弟の破格の寵遇に武一族の面々が焦っていつそのこと武皇帝を殺して皇位を奪ってしまおうとする暴挙に出るといふ筋立ては単なる妄想とはいえないだろう。

武氏を破滅させたならば、次の標的は李旦だ。後継者と目される者を次々に狙う。武皇帝は誰も信じられなくなる。最後に残るのは反逆の全ての企みを明らかにした一人の男、母と慕う男だ。

衛遂忠は来俊臣を礼讃する。

「完璧でございますな。旦那様が手掛けてこられた数多くの事件のなかでもこれは最高の出来となりましょう。何の苦労もなく高い地位に昇って、野放図に欲望



を膨張させた不埒な連中を一網打尽にする。これほどの快挙がございましたでしょうか。苦勞人の旦那様でなければできないことでございます。どうなのででしょうか、昔にも旦那様のような優れたお方がいたのでありますでしょうか。旦那様と肩を並べられそうな人となりますと、さしずめ」。

衛遂忠は低い身分から高くに昇った歴史上の大物を並べ、案外と物知りなところを見せる。

来俊臣は笑いながら、

——こいつの口はうますぎる。

衛遂忠が知ってはいそうにない名を挙げて煙に巻こうとする。

「俺に言わせれば、昔の人で最も優れているのは石勒せきろくだろうな」。

衛遂忠は馬鹿みたいにほかんと口をあけ、

「はあ、それは誰でございますか」。

「なんだ知らぬのか」。

「知らぬも何も、あつしなどは無知を画に描いたような男でございます。もとより何も知らないのでもございます」。

「それにしてはべらべらしゃべっていたではないか」。

衛遂忠は大袈裟に謝り、

「本当に何も知らないのでもございます」。

「石勒はだな、地の底から這い上がった男だ。それも底も底で、二人一組で枷にはめられて奴隸として売られた男だ。牛馬以下の値段だったから、買った主人は何も惜しまず残虐に扱った」。

そのように言いつつ、来俊臣は、不意に自分の本当の父かも知れぬ蔡本の最期

を思う。

「それはまた大変な苦勞人でございますな」。

「石勒は死ぬばかりの目に遭つてもへこたれず、いつか見返してやると、世の混乱に乗じて馬賊の仲間に入った。武將として名を挙げ、最後は驚くなかれ、趙ちゆうという国の皇帝にまでなった。奴隸から皇帝だ。世の中を完全に引っくり返したとてつもなく偉い人だ。そうは思わぬか」。

「なるほど、聞けばたいした人でございますな」。

「今回の勝負がうまくいけば、俺も少しは石勒に近づけるだろうか」。

「そうでございますとも。旦那様も『朕は』とかおっしゃるようになるのでございませう」。

衛遂忠は顔を大きく歪めて笑う。

来俊臣は勝負に熱くなる。

武一族の面々を一網打尽にして推事院の獄をいっぱいにとできるところまで段取りが進む。

早ければ今日にも武皇帝の許可が下るだろうという朝に、来俊臣はいつものように女たちの見送りを受けて推事院に向かう。麗景門の前で輿を降りる。

武装した一団がぬっと現れる。来俊臣はすばやく輿に戻ろうとする。羅織の臣は常に身の危険と隣り合わせだ。警護の兵がなぜかさっと消え去り、来俊臣の腕が強く掴まれる。

「何をする」。

別の男に腋を抱えられ、

「例竟門の内にお連れします」。

「放せ。わしを来俊臣と知ってのことか」。

「無論です」。

「わしはこの門の内で仕事をしている。乱暴するな。わしは門のなかに入ろうと  
していたところだ。放せ」。

さらに数人の者に体のあちこちを掴まれる。身をねじって逃れようとする  
顔面に拳が飛ぶ。たちまち殴る蹴るで、来俊臣は気を失う。

意識が戻って、耐え難い全身の痛みに呻く。血の味が鼻を突く。口中のものを、  
身を起こして吐き出そうとするが体が動かない。強く縛られている。

「誰かきてくれ」。

叫ぼうとしても、息が苦しい。

暗い天井と壁と格子がある。自分が獄中に置かれているのを知る。

「ここから出せ」。

また叫ぼうとして、咳き込む。体を引き裂かれるような痛みが走る。

じつところらえていると、格子の向こうに背の高い人影が現れる。衛彦忠だ。

「おい、わしをここから出してくれ」

やっとの思いで声をしぼり出す。

衛彦忠は、格子に顔をびったり付け、

「お目覚めでございましたか。それで、旦那様は、いま、出してくれとおっしゃったのでしょうか」。

「そうだ」。

衛彦忠は気味悪く笑い、

「そうでございましたか。それはよかった。頼まれるまでもなく、旦那様をお出

しするためにあつしはここにきたのでございます。

「そうか。早くしてくれ」。

衛遂忠は門をはずしてなかに入ってくる。

来俊臣は起き上がろうとして、やはり動けない。

「痛くてたまらぬ。この縄をどうにかしてくれ」。

「左様でございますか。お気の毒でございますな」。

衛遂忠は近づき、縄の端を掴んで来俊臣の体をぐいと引っ張り、床をずるずると引き摺り始める。

体が擦れて激烈な痛みが走る。

「やめてくれ」。

「まことおかしなことをおっしゃいますな。出してくれとおっしゃって、そうし

てさしあげると、やめろとおっしゃる。」

「手荒な真似はよせ」

「左様でございますか。そのためには、まことに御苦勞ではございますが、歩いていただかなくてはなりません」。

「だったら繩をほどいてくれ。立つこともできない」。

「立てませんか」。

衛遂忠は来俊臣を釣り上げる。繩が食い込み、悲鳴を上げる。

「さあ、お歩きください」。

来俊臣は痛みをこらえて歩み、着いたのはいつもの糾問の場。扉の前でわずかに渋ると、衛遂忠に背中を蹴られ、床を倒される。そのままごろごろとなかに転がされる。



顎を掴まれ、無理に顔を上げさせられ、

「旦那様のお好みはどれでございましたかな」。

十種の枷が並べてある。

「まだあったのか」。

「旦那様がお好きでございましたからな。喜んでいただくごと、あつしが特に保管していたのでございます」。

「これをわしに使うのか」。

「旦那様は覚えておられましょう、周興様には大甕を御用意されました。索元礼様は鉄圈籠頭でした。旦那様にはこれを御用意するのが道理でございます」。

「いや、頼む、これは勘弁してくれ。推事院ではもうこれは使わぬのだ」。

「旦那様のお望みは適えてさしあげたいと思っております。これまでさんざんお

世話になった御恩がございます。あつしは御存知の通り、根はいい人間でござい  
ますから、このような物は昔から使いたくなかったのでございます。今日も使わ  
ずにすむのならそれが一番です。それには、ここに書いてあることをそっくりそ  
の通りとお認めいただきましようかな」。

衛彦忠は告発状を示す。

「ああ、どうか頼む、それを読み上げる前に、お上に会わせてくれまいか。お上  
にわからず直接何もかも申し上げる」。

「あつしは旦那様の忠実な僕にございます。旦那様が一度でも罪人に対して同じ  
ことをなさっておられたならば、あつしも喜んでさせていただきますましよう」。

来俊臣は衛彦忠を見上げ、

「おまえは本当にいい人間だ。これまでにおまえに悪くしたことがあったかい。

どうか思い出してくれ」。

「旦那様はそれはそれはよくしてくださいました」。

「ならばどうしてこのわしを」。

「天下のためならぬ罪人を調べるのが推事院の仕事にございます。私情を挟んではならぬと、旦那様に厳しく躰けられました」。

「推事院はその通りだ。わしは天下のために己を棄てて尽くした。義を貫き、わしほど忠であった者はいないはずだ」。

「ここにはそうではなかったと書いてございます」。

「何が書いてあろうと、どうせでたらめだ」。

「お上の御裁可が下された告発状がこれまで一度でもでたらめであったことがございましてでしょうか」。

「わしに限っては違う」。

「そのようにおっしゃるのでございしたら、どうぞ、あの枷のお好きなものをお選びいただきましょうか」。

「何の恨みがあるのだ」。

「何もございせん」。

「ならばなぜなのだ」。

「強いて申せば、あの枷に染み込んだ血が旦那様をお呼びするのでございまいしょうか」。

衛遂忠は告発状を読み上げる。第一に、人を無実の罪に陥れようとする誣告おしこくの罪。最も公正でなければならぬ推事院の長の立場にありながら、しかも武承嗣のように国家の要職にある人物多数を亡き者にしようとしたのはこの上もない重

大犯罪である。第二に、不法に人の財産を奪った罪。推事院の長の立場を利用して罪を重ねたのは極めて悪辣である。それに王慶誅の件、西突厥の酋長の件、等々、大小の罪が列挙されている。

推事院の詮議に逆らうのは無駄であるのを来俊臣以上に知っている者はいない。全てを認め、最初の取り調べで供述すれば死を赦されるという来俊臣自身が作った規定に希望を繋ぐ。

最終的には前回と同様に武皇帝の心に託すしかない。

**七**日間を獄中で過ごす。刑が決まるまでこれほど長くかかるのは推事院では珍しい。武皇帝の特別の思召しを来俊臣は期待する。

——俺の本当の心をお上はわかってくださるはずだ。

格子の向こうに衛彦忠が現れる。顔に笑みを浮かべている。

「どうなった」。

「あつしと一緒にここを出ていただくことになりました」。

「赦されたのか」。

衛彦忠はひどく甲高い声で笑う。

「まことに残念でございますな。旦那様は吉垣様に負けたのです」。

「どういうことだ」。

「まことに御足労ながら、ここを出てすぐに市場に行っていたかなければならないことになりました」。

床に崩れそうになる身を、来俊臣は羅織の臣の矜持で保つ。

「市に行つて、この首を刎ねられればよいのか。そういうことだな」。

「まこと左様にございます。」

格子を開けて衛遂忠が入ってくると、来俊臣はたちまち嚴重に縛られる。

衛遂忠は来俊臣を外に引き出しながら、

「さぞかしお聞きしたいでありますよう。」

「何をだ。」

「吉頃様がどうしてお勝ちになったかです。」

「聞いたところで仕方ない。」

衛遂忠は勝手に話す。

来俊臣が自供した後で、武承嗣たちは、来俊臣が犯した罪は並外れており、今度こそは死を免じることなく斬首に処すべきだと、連日参内して武皇帝に訴えた。

「武皇帝はそのたびに言った。」

「来俊臣は国に功ある者。朕はしきりにそれを思っておる」。

武皇帝はなかなか結論を出さず、ある日のこと、思案に余って、車に乗って宮中の苑を巡った。ふと顔を上げると、馬の轡を執るのは吉頃であった。

「そちであったか」。

吉頃がなぜそこにいるのかを察し、武皇帝は苑に咲く花のことなどに話をそらした。吉頃は敢えて口にした。

「宮中の外で人々は怪しく思っております」。

武皇帝の顔が俄かに陰しくなった。

「来俊臣は国に功ある者。朕はしきりにそれを思っておる」。

吉頃は来俊臣の罪を数え上げた。

武皇帝は言った、



「罪は罪だ。しかし、あれは朕を母のように慕っておるのだ」。

そこまでを衛遂忠から聞いて、来俊臣は、

「ああ、それでももうよい。もう十分だ。そのお言葉でわしは斬られて何の恨みもない」。

「最後までもう少しでございますからお聞き下さい」。

「どうせ、吉頊が詰まらぬことをお耳に入れたのであろう」。

「お上がなおもお心を決しかねておられるご様子に、吉頊様は言いました。『帰るところのない無数の冤魂をどうかお憐れみください』。お上は俄にお怒りになりました。『冤魂とは何だ。朕のこれまでの裁可が間違っていたと申すのか』。恐ろしいばかりの剣幕でございました」。

来俊臣は顔を上げる。

「そうだ、冤魂など一つもありはしない。全てが正しく処罰された。羅織は忠の極みだ。わしはそれに命を捧げたのだ」。

「でしたら、旦那様に関わるこの案件も正しいのでございますな」。

「ああ、お上がお決めになったのならそうだ。吉瑱があらぬことを言ったのなら違う」。

「吉瑱様はお上のお怒りがおさまるのを待つて言いました。『謀反の心がある確かな証拠がございます』と。『あれに限ってあるはずがない。母と慕う朕に謀反を企てるなど、あれは決してしない』。『そうではないのでございます。己を石勒に比し、皇帝になってみせると豪語しておるのでございます。それで邪魔になる者を消そうとしたのです』」。

来俊臣はうめく。

「おまえ、俺を売ったのか」。

「あつしは獄吏として真実のみを追及するよう、旦那様に叩き込まれてごめいます」。

「おまえに何も悪いことはしていなかっただろう」。

「へい、その通りでございます。周興様も確かにそのようにあつしのことを思っていたでありますよう」。

**来**俊臣は慣例によって丸太で口を塞がれ、洛陽の市場へと曳かれる。

道の左右に並ぶ人々の眼差しが来俊臣の身に突き刺さる。

——俺が殺されるのがそんなにも嬉しいのか。

洛陽の市場でこれまでにあまたの処刑が行われたが、群衆がこれほどまでに興

奮したことはかつてない。

——羅織の臣は死をもつて職務を終える以外にない。俺は羅織に殉じるのだ。

来俊臣は胸を張る。

「まあ、あれが来俊臣ですの」。

ざわめきのなかから女の囁きが聞こえる。

——そうだと。これが来俊臣だ。よく見てくれ。

顔を上げ、女の方に向ける。この世に二人しかいない美人の母が生んだ息子は、死を目前にし、妖しい色香をなおも放つ。

女の嘆息が聞こえる。

「幸せでございます」。

いつもそう言ってくれた屋敷の女たちを思う。

——本当の俺は美しいのだ。身も心も。

刑場に着き、処刑台の上に据えられる。

「旦那様とはこれでお別れでございますな。あっしのせめてもの心でございます」。

衛彦忠は丸太を引き抜く。

「世話になったな」。

いまさら恨み事を言っても仕方ない。衛彦忠はこのような男なのだ。

「最後にお聞かせしたいことが一つございます」。

「いまに首が飛ぶのだ。もうよい」。

「お上のお言葉にございます」。

かつて魏元忠は処刑の直前に救われた。来俊臣は周囲を見る。食らいつかばかりの憎悪がある。来俊臣は世の中がひっくり返るのを望んでいた。民衆にとつ

て、いまは来俊臣の死こそが世の中のひっくり返ることなのである。赦免をもらす勅使の姿はない。

衛彦忠は言う。

「お上は吉頃様の目の前で裁可をお下しになられますと、おっしゃったそうにございます。『母として慕う気持ちがあまことに純なものであったならば、後を継がせても構わなかった』」。

「まことか」。

——ならばひたむきに母を慕っていればよかった。

来俊臣は深く悔やむ。

衛彦忠は顔を歪めて声を出さずに笑う。

——これは最後の佞弁ではないのか。

このような者に最後の思いを乱されてはならないと、来俊臣が考えたその瞬間に、首が落ちる。

その首を、その胴体を、衛遂忠は処刑台から抛り投げる。群衆が押し寄せ、眼を抉り、耳を削ぎ、皮を剥ぎ、肉を刻み、腸を抉り、骨を砕き、死骸はたちまち雪解けの泥と化す。